東京高等師範學校教授 高木敏雄著

日本建國神話 全

東京
大阪 寶文館藏版

45. 3. 26
内交

332-242

序

本書は著書が昨年五月公にしたる日本の神話的傳說集「日本神話物語」の姉妹篇にして、日本神話を傳承を綜合して、首尾一貫せる一部の物語に書綴りたるもの、その從來の神代史物語類と異るところは、世界無比の帝國を建設し、維持し、發展せしめ、將來益發展せんとする吾民族が、其國家の由來に就て語傳へたる神話的傳承の眞面目を發揮せんことを勉めたるに在り。著者常に謂へらく、世界に五大神話あり。印度神話は宗教的神話なり、希臘神話は社會的神話なり、北歐神話は哲學的神話の性質を有し、支那神話は民族神話の性質を有す。此間に在りて、國家的神話の面目を發揮して遺憾なきものは、獨り吾日本民族の神話あるのみと。故に著者は日本神話を名けて「建國神話」と云ひ、窃に思へらく、此名稱は日本神話の特色を完全に言ひ現は

せるものにして、先輩の未だ云ひ能はざりし所なりと。著者また常に信ずらく、國家を離れて人文なし、凡ての人文は遺傳に基く。遺傳は即ち國民性の母にして、國民性の自覺は國民將來の發展の指導たる可きものなりと。此意義に於て、國民教育は祖先の神話的傳承の智識を一日も缺くべからず。不幸にして平田篤胤の「古史成文」以來未だ國民教育の資とするに足るべき日本神話の叙述なし。これ著者が淺學を顧ず、敢て「日本建國神話」を草するに至りたる所以なり。世界無比の神聖なる皇室の尊嚴と、此皇室を中心として勃興したる雄大なる國民の國家建設の由來とは、此小冊子によりて稍十分に之を示すことを得たりと信ず。

「延喜式」の祝詞は日本國民獨特の産物にして、世界に其類を見ず。所々に本文の條下に之を掲げて、皇室中心主義の國家の性質を明か

に知らしめんと勉めしは、微意の存するところなり。附錄とせる一文は昨年十月、法科大學第三十二番教室に開かれたる人性學會第一回講演會に於ける著者の講演の筆記にして、日本神話によりて日本民族の國民性を論じたるものなり。本書の讀者の參考となるべきを信じて、卷尾に採錄せり。

本書編述の目的は、主として國民教育の資とするに足るべき日本神話の叙述にあるを以て、神話の源泉に對しては、毫も學問上よりの高等批評を加へず、成る可く傳承のまゝに從はんことを勉めたり。唯本書叙述の範圍が、他の神代史物語類と異りて、人代に亘れるは、建國神話叙述の性質より生ずる必然の結果にして、將來の研究は必ず著者の態度を是認するに至る可きを信ず。

之を要するに、「日本神話物語」が日本に於ける最初の神話的傳說集

たりしが如く、其姉妹篇たる本書もまた日本に於ける最初の神話叙述なるを以て、著者の苦心の大なりしに比して、其結果の満足なる能はざりしは、事情止むを得ざるに出づと雖も、また頗る遺憾とする所なり。希くは賢明なる讀者の叱責を辱ふして、他日の訂正を試み得んことを。

明治四十五年三月

著者識

日本建國神話目次

高天原の巻

天地開闢……一
神世七代……三
游能碁呂島……六
生島足島……八
祈年祭祝詞……一一
風の神……一二
龍田風神祭祝詞……一三
河海神……一六
祈年祭祝詞……一七

山神木神野神草神……一八
祈年祭祝詞……一九
大殿祭祝詞……二〇
火迦具土神……二二
鎮火祭祝詞……二三
豐宇氣比賣神……二五
廣瀬大忌祭祝詞……二六
天之尾羽張……二八
黃泉校坂……三一
障神……三六
道饗祭祝詞……三七
橘之小門檍原……三八

三柱貴子……四二
月夜見尊……四四
素戔嗚尊……四六
天之眞名井……四八
天津罪……五四
大祓祝詞……五六
天之窟戸……六〇
大殿祭祝詞……六八
御門祭祝詞……六九
祈年祭祝詞……七〇
神衣祭祝詞……七一
千座置戸之祓具……七一

豐葦原の卷……七五
五十猛命……七五
八岐大蛇……七七
須賀宮……八二
庭津日神座摩之神……八四
祈年祭祝詞……八六
八束水臣津野命……八七
御年神……九〇
祈年祭祝詞……九二
大國主命……九四
味鉏高彦根命……一〇六

高志國沼河比賣……一〇七
須勢理比賣命……一一一
少彦名命……一一六
御室山……一二〇
天之日矛命……一二三
伊豆志袁登賣神……一二七
瑞穗國の卷……一三一
饒速日命……一三一
天稚彦……一三五
喪山……一四二
健御雷命……一四四

健御名方命……一四八
杵築之宮……一五一
天之穂日命……一五四
出雲國造神賀詞……一五五
大物主神……一五九
春日……一六二
春日祭祝詞……一六三

高千穂の巻……一六五

天津日高彦火邇々藝命……一六六
猿田彦命……一七〇
高千穂穂槌觸峯……一七四

天之忍雲根命……一七七
中臣祓詞……一七七
大嘗祭祝詞……一八〇
木花咲夜姫命……一八一
無戸八尋殿……一八四
彦火々出見命……一八八
海神乃宮……一九二
潮滿珠潮乾珠……一九九
豐玉比賣命……二〇四
鵜葺草葺不合命……二〇七

秋津洲の巻……二〇九

五瀨命若御毛沼命……二〇九
長髓彥……二一二
高倉下……二一五
八咫烏……二一八
兄宇迦斯弟宇迦斯……二二一
八十梟帥……二二五
可美眞手命……二三六
神倭磐余彥命……二四一
祈年祭祝詞……二四四
御魂鎭……二四五
鎭御魂齊戸祭祝詞……二四六
伊勢津彥……二四七

伊須氣余理比賣命……二五〇
大國魂神……二五六
大田々根子命……二六〇
倭迹々日百襲姬命……二六六
出雲振根……二七〇
出雲大神宮……二七三
伊勢大神宮……二七六
祈年祭祝詞……二七七
月次祭祝詞……二七八
草薙寶劍……二八〇
大八島國……二八三
遷却崇神祭祝詞……二八五

本書中に於ける祝詞目次

祈年祭祝詞……一一
同　上……一七
同　上……一九
同　上……七〇—八六
同　上……八六—
同　上……九二
同　上……二四四
同　上……二七七
龍田風神祭祝詞……一三
大殿祭祝詞……三〇

同　上……六八
鎮火祭祝詞……二三
廣瀬大忌祭祝詞……二六
道饗祭祝詞……三七
大祓祝詞……五六
御門祭祝詞……六九
神衣祭祝詞……七一
出雲國造神賀詞……一五五
春日祭祝詞……一六三
中臣壽詞……一七七
大嘗祭祝詞……一八〇
鎮御魂齊戸祭祝詞……二四六

月次祭祝詞……二七八
遷却崇神祭祝詞……二八五

附錄

神話に現はれたる日本國民性……二八九

日本建國神話目次終

日本建國神話

高木敏雄著

高天原の巻

天地開闢

古昔天地未だ判れず、萬の物未だ成らざりし時の狀は、譬へば浮べる雲の大海原の面に漂ひて、係るところなきが如く、渾沌として鷄卵子の黄白散亂れて混れるが如く、形狀なくまた區別なし。然る後に輕く清

める氣は漸く登りて薄く靡きて天と成り、重く濁れる物は自ら沈みて濃く滯りて地と成れり。其はじめに成りたる天を高天原と云ひ、後に定りたる地を國と云ふ、天地の間に大虚ありて空しく懸れり。

天地開闢けしはじめ、國尙稚く砂土浮れたゞよひて、海月の海水に泳けるが如く、浮脂の水の上に漂へるが如く、未だ固まらざりし時に、葦牙の如き物自ら其中に成り出てゝ、此物の萠騰りて大虚の中に登りたるによりて、高天原に化生てたまへる最初の神を天讓日天狹霧國禪月國狹霧尊と申奉る、天祖と稱したてまつるは此御神なり。然る後に高天原に自ら化生てたまへる神たちの中に、獨りづゝ化生てたまへるを獨化天神と申し、二柱俱に化生てたまへるを俱生天神と申し、男神と女神と共に化生てたまへるを耦生天神と申したてまつる。また別に化生てたまへる神あり、別天神と申したてまつる。

神世七代

天地開闢のはじめ、高天原に化生てたまへる天神の順序は、天之御中主神、次に可美葦牙彦舅神、此二柱の神を一代の俱生天神と申したてまつる。次に國常立神、次に豐國主神、此の二柱の神を二代の俱生天神と申したてまつる。天之御中主神の亦の御名を天之常立神と申し、また天之底立神と申し、國常立神の亦の御名を國之底立神と申し、豐國主神の亦の御名を豐雲野神と申したてまつる。此時に化生てたまへる別天神は、天之八下尊なり。

次に國地尙稚かりし時に成りたまへる天神の順序は、宇比智邇神、次に其妹神須比智邇神、此二柱の神を三代の耦生天神と申したてまつる。

次に角機神、次に其妹神活機神、此二柱の神を四代の耦生天神と申してまつる。次に大斗能地神、次に其妹神大斗乃辨神、此二柱の神を五代の耦生天神と申したてまつる。次に淤母陀琉神、次に其妹神阿夜訶志古泥神、此二柱の神を六代の耦生天神と申したてまつる。次に伊邪那岐神、次に其妹神伊邪那美神、此二柱の神を七代の耦生天神と申したてまつる。一代の俱生天神より七代の耦生天神までを合せて、神世七代といふ。

また別に化生でたまへる天神の順序は、天之三降尊、次に天合尊、次に天之八百日尊、次に天之八百萬魂尊、次に高皇産靈尊、次に神皇産靈尊、次に津速魂尊、次に振魂尊、次に萬魂尊と申したてまつる。

高皇産靈尊の御子を天之思兼命と申し、次に天之太玉命と申し、次に天之忍日命と申し、次に天之神立命と申し、神皇産靈尊の御子を天之御

食持命と申し、天之道根命と申し、天之神玉命と申し、生魂命と申し、津速魂尊の御子を市千魂尊と申し、此神の御子を興登魂命と申し、此神の御子を天之兒屋命と申し、武乳遲命と申し、振魂尊の御子を前玉命と申し、天之忍立命と申し、萬魂尊の御子を天之剛川命と申したてまつる。

伊邪那岐伊邪那美二柱の神は、後に天降りしたまへり。

高皇産靈尊と神皇産靈尊は、後に伊邪那岐尊の御子天照大御神を助けたまへり。また高天原に坐まして、常に此國を護りたまふにより、後の世に神祇官の八神のはじめに坐ます。

其諸の天神たちは、永く高天原に鎮りまして、此國を護りたまひ、また後の天皇の祖神に坐ますにより、後の世の祝詞に其男神女神を合せて、高天原に神留ります皇親神魯岐神魯美乃命と申したてまつりて、尊び敬ひたまへり。

淤能碁呂島

然して後に、天祖天譲日天之狹霧國禪月國之狹霧尊高天原に坐まして、伊弉那岐伊弉那美妹妹二柱の神に、此漂へる國を造り固めて、豐葦原之千五百長五百秋瑞穂國につくりなせと詔ひて、天瓊矛を授けたまへり。伊弉諾伊弉冉二柱の神乃ち天祖の教悟したまひしまゝに、天浮橋に立出でたまひて、大虛より遙に見下したまへば、狹霧のみ立ちこめたる中に浮膏の如く漂へる物あり。其中に國あらんと思ひたまひて、天瓊矛を以て探りて見たまへば青海原あり、乃ち其矛を指下して青海原を韮めぐらして引上げたまへば、其矛の末より滴垂落る潮水凝結りて、自ら一つの島となる、此島は淤能碁呂島なり、おのづから凝りたる島な

るによりて淤能碁呂島と云ふなり。

伊弉那岐伊弉那美妹妹二柱の神乃ち此島に天降りしゝ、天瓊矛を島の上に衝立てゝ、國中の天御柱と立てたまひ、此御柱の周圍に八尋殿を立てめぐらして、共に住みたまふ時に、伊弉那岐尊その妹伊弉那美尊に、「汝が身は如何にか成れる、」と問ひたまへば、伊弉那美尊答へて、「吾身は成なりて、成合はざる處一處あり、」と白したまふ。伊弉那岐尊聞きて、「吾身は成なりて成餘れる處一處あり。然れば吾と汝と共に夫婦に成りて、國土を生まんと思ふは如何に、」とのたまへば、伊弉那美尊答へて、「其善からん」と白したまふ。伊弉那岐尊其とき、「然れば吾と汝と天御柱を行廻り、廻り遇ひて子うまん、汝は左より廻りたまふべし、吾は右より廻らん、」と定めたまひて、天御柱を分れめぐりて、また出會ひたまふ時に、伊弉那美尊先づ、「あなにやし、うましをとこ、」と唱へたまひ、伊弉那岐尊次に、「あな

にやし、うましをとめ、」と唱へたまふ。伊弉那岐尊此く唱へたまひて後に、「吾は男子なるによりて、先づ唱ふべきに、汝は婦人として先づ唱へしこと善からじ、然れども試に共に夫婦に成りて子うまん、」とのたまひて、生みたまはんとする時に、其術を知りたまはず。其時鶺鴒飛來りて頭尾を掉せしかば、二柱の神見たまひて、子生むべき法を悟りたまひて、先づ蛭子を生みたまふ。此子は三歳に成るまでも脚立たざりしかば、葦船に入れて風のまに〳〵流しすてたまへり。次に淡島を生みたまふ。此島も御子の數に入らず。

生島足島

茲に伊弉那岐伊弉那美二柱の神ともに議りて、「今吾が生みたる子皆

よからず。然れば尚天祖の座ます高天原に復上りて具に此狀を申して教を乞はん、」とのたまひて、乃ち共に高天原に復上りて申したまへば、天祖聞きて乃ち太占を以てトひて教へたまはく、「婦女先づ唱へしによりて、良からず。然れば亦改め降りて、改めて唱へて子生むべし、」とのたまひて、吉日をトひさだめて、二柱の神を天降したまへり。

二柱の神乃ちまた天降りしたまひて、改めて伊弉那岐尊は左より、伊弉那美尊は右より其天御柱を行廻りて廻遇ひたまふ時に、伊弉那岐尊先づ、「あなにやし、うましをとめ、」と唱へ、伊弉那美尊次に、「あなにやし、うましをのこ、」と唱へ、此く唱へたまひて先づ淡路島を生みたまふ。また淡路穂狹別島といふ。此島も二柱の神の御心に適はず、此によりて胞と爲したまへり。

次に此島を胞として、伊豫二名島を生みたまふ。此島は身一つにし

て面四つあり、面毎に名あり。伊豫國を愛比賣と云ひ、讃岐國を飯依比古と云ひ、阿波國を大宣津比賣と云ひ、土佐國を建依別と云ふ。次に筑紫島を生みたまふ。此島もまた身一つにして面五つあり、面毎に名あり。筑紫國を白日別と云ひ、豐國を豐日別と云ひ、火國を速日別と云ひ、日向國を豐久士比泥別と云ひ、熊襲國を建日別と云ふ。次に壹岐島を生みたまふ、また天一柱と云ふ。次に津島を生みたまふ、また天狹手依比賣と云ふ。次に隱岐三子島を生みたまふ、また天忍許呂別と云ふ。次に佐渡島を生みたまひ、次に大倭豐秋津島を生みたまふ。此島の亦の名を天御虛空豐秋津根別と云ふ。此くはじめに此八島を生みたまひしによりて、大八島國と云ふなり。

然して後還りたまふ時に、吉備兒島を生みたまふ、また建日方別と云ふ。次に小豆島を生みたまふ、また大野手比賣と云ふ。次に大島を生

みたまふ、また大多麻流別と云ふ。次に日女島を生みたまふ、また天一根と云ふ。次に知訶島を生みたまふ、また天忍男と云ふ。次に兩兒島を生みたまふ、また天兩屋と云ふ。合せて六島なり。

其他の處々の小島は、皆潮沫の凝りて成れるなり。

大八島國の御靈を生島足島と云ひ、また生國足國と云ふ、生島の御巫の齊きまつる神なり。

祈年祭祝詞

生島の御巫の稱辭竟へまつる。

皇神等の前に白さく、生國足國と御名は白して、稱辭竟へたてまつらば、皇神の敢きます島の八十島は、谷蟆の狹度る極み、潮沫の留る限り、狹き國は廣く、峻き國は平けく、島の八十島墮ることなく、皇神等の依さしたてまつる故に、皇御孫命の宇豆乃御幣帛を稱辭竟へたてま

つらくと宣る。

風神

伊邪那岐伊邪那美二柱の神既に國の八十國島の八十島を生みたまひて後に、其生みたまへる國を見渡したまへば、唯狹霧のみ立ちこめたり。茲に伊邪那岐尊「吾生みたる國には、唯朝霧のみ薫り滿てるかも、」とのたまひて、乃ち其狹霧を吹撥ひたまへば、其御氣息によりて風神化生でたまふ。此神の御名を志那都比古神と申し、次に化生でたまへる其妹神の御名を志那都比賣神とも、また志那斗邊神とも申したてまつる。此二柱の神を合せて、天之御柱命國之御柱命と申し、龍田の立野に鎮りますによりて、龍田彦龍田姫命とも申したてまつる。

龍田風神祭祝詞

龍田に稱辭竟へたてまつる。

皇神の前に白さく、敷島に大八洲國知しゝ皇御孫命の遠御膳の長御膳と、赤丹乃穂にきこしめす五種の穀物を始めて、天下の公民の作れる物を、草の片葉に至るまで、成したまはぬこと、一年二年にあらず、歳普く傷へるゆえに、百の物知人等の卜事に出てむ神の御心は此神と白せと仰せたまひき。

此を物知人等の卜等を以てトへども、出る神の御心も無しと白すと聞しめして、皇孫命の詔たまはく、神等をば天社國社と忘るゝことなく、遺ることなく、稱辭竟へたてまつると思しめすを、誰の神ぞ、天下の公民の作りとつくる物を成したまはず、傷へる神等は、我御心ぞと悟したつまつれと誓ひたまひき。

是を以て皇御孫命の大御夢に悟したてまつらく、天下の公民の作りとつくる物を、惡き風荒き水に逢はせつゝ、成したまはず傷へるは、我御名は天乃御柱乃命國乃御柱乃命と、御名は悟したてまつりて、吾前に奉らむ幣帛は、御服は明妙照妙和妙荒妙五色の物楯矛御馬に御鞍具へて、品々の幣帛備へて、吾宮は朝日の日向ふところ、夕日の日隱るところの、龍田の立野の小野に、吾宮は定めたてまつりて、吾前を稱へ辭竟へたてまつらば、天下の公民の作りとつくる物は、五の穀物を始めて、草の片葉に至るまで、成し幸はへたてまつらむと悟したてまつりき。

是を以て皇神の辭教へたてまつる處に、宮柱定めたてまつりて、此の皇神の前に稱辭竟へたてまつると、皇御孫命の宇豆の幣帛を捧げもたせて、稱辭竟へたてまつらくと、皇神の前に白したまふことを、神

主祝部等諸聞しめせと宣る。

奉る宇豆の幣帛は、比古神に御服は明妙照妙和妙荒妙五色の物、楯戈御馬に御鞍具へて、品々の幣帛たてまつり、比賣神に御服備へ、黄金の麻笥黄金の揣黄金の持、御馬に御鞍具へて、種々の幣帛たてまつりて、御酒は瓫の邊高知り、瓫の腹滿雙べて、和稻荒稻に山に住むものは毛乃和物毛乃荒物、大野原に生るものは甘菜辛菜、青海原に住むものは鰭乃廣物鰭乃狹物、奥都藻菜邊都藻菜に至るまでに、横山の如打積置きて、奉る此宇豆の幣帛を安幣帛乃足幣帛と、皇神の御心に平けくきこしめして、天下の公民の作りとつくる物を、惡き風荒き水に逢はせたまはず、皇神の成し幸はへたまはゞ、初穗は瓫の邊高知り瓫の腹滿雙べて、汁にも顆にも八百稻千稻に引居置きて、秋の祭に奉らむと、皇神の前に稱辭竟へたてまつる。

皇御孫命の宇豆乃幣帛を、神主祝部等うけたまはりて、墮ることなく奉れと宣たまふ命を、諸聞しめせと宣る。

河海神

伊邪岐、伊邪那美尊二柱の神、國を生みたまひて後に、神を生みたまふ。先づ大事忍男神を生み、次に石土毘古神を生み、次に石巢比賣神を生み、次に大戸日別神を生み、次に天之吹男神を生み、次に大屋毘古神を生み、次に大綿津見神を生み、次に速秋津日子神を生み、次に速秋津比賣神を生みたまふ。

大綿津見神は海神なり、速秋津日子速秋津比賣妹妹二柱の神は水戸の神なり。

此速秋津日子速秋津比賣二柱の神、河海に因りて持別けて、河海の神また水の神、合せて八柱の神を生みたまふ。先づ沫那藝神を生み、次に沫那美神を生み、次に頬那藝神を生み、次に頬那美神を生み、次に天之水分神を生み、次に國之水分神を生み、次に天之久比奢母知神を生み、次に國之久比奢母知神を生みたまふ。

二柱の久比奢母知神は汲匏を持ちたまへる水の神なり、また其二柱の水分神は高き山低き山の峯に座まして、水を分ちたまふ神なるによりて、後の世の祈年祭に此神にも雨を祈りたまひて、幣帛をたてまつりたまへり。

祈年祭祝詞

水分に座す皇神等の前に白さく、吉野、宇陀、都祈、葛木と御名は申して、稱辭覓へたてまつらば、皇神等の寄さしたてまつらむ奥津御年を、

八束穂の伊賀志穂に寄さしたてまつらば、皇神等に初穂は穎にも汁にも、瑞の遊高知り、瑞の腹滿雙べて、稱辭竟へたてまつりて、遐をば皇御孫命の朝御食夕御食の神穎に、長御食の遠御食と、赤丹穂にきこしめす故に、皇御孫命の宇豆乃幣帛を、稱辭竟へたてまつらくを、諸聞しめせと宣る。

山神木神野神草神

次に木神を生み、次に山神を生み、次に野神を生みたまふ。木神の御名を木祖神と申し、また久久能智神とも申し、山神の御名を大山津見神と申し、野神の御名を野椎神と申し、また草祖に坐ますによりて、草野比賣神とも申したてまつる。

大山津見神と草野比賣神妹妹二柱の神、山野に因りて持別けて八柱の神を生みたまふ。先つ天之狹土神を生み、次に國之狹土神を生み、次に天之狹霧神を生み、次に國之狹霧神を生み、次に天之闇戸神を生み、次に國之闇戸神を生み、次に大戸惑子神を生み、次に大戸惑女神を生みたまふ。

久久能智神のまたの御名を屋船命と申したてまつる、稻の靈豐宇氣比賣命と共に、天皇の大殿を護りたまふ。其大殿を造りたまふ木は、山神に請ひたまふによりに、此神にも幣帛を奉りたまへり。

祈年祭祝詞

山口に座す皇神等の前に白さく、飛鳥、石村、忍坂、長谷、畝火、耳無と御名は申して、遠山近山に生立てる大木小木を、本末打切りて持參りきて、皇御孫命の瑞乃御舍仕へたてまつりて、天の御蔭日の御蔭と隱坐

して、四方國を安國と平けく知しめすがゆえに、皇御孫命の宇豆乃幣帛を、稱辭竟へたてまつらくと宣る。

大殿祭祝詞

高天原に神留坐す皇親神魯岐神魯美の命もちて、皇御孫命を天津高御座に坐さしめて、天津璽の鏡劍を捧けもちたまひて、言壽ぎ宣りたまはく、皇我宇都の御子皇御孫命此の天津高御座に坐まして、天津日嗣を萬千秋の長秋に大八洲豐葦原瑞穗之國を安國と平けく知しめせと、言寄さしたてまつりたまひて、天津御量もちて、言問ひし磐根木根立草の片葉をも言止めて、天降りたまひし食國の天下と、天津日嗣知しめす皇御孫命の御殿を、今奥山の大峽小峽に立てる木を、齊部の齊斧をもちて伐採りて、木末をば山神に祭りて、中間を持出來て、齊鉏をもちて齊柱立てゝ、皇御孫命の天の御蔭日の御蔭と造り仕へた

てまつれる瑞乃御殿を、汝屋船命に天津奇護言をもちて、言壽鎮め白さく、

此の敷坐す大宮地は、底津磐根の極み、下津綱根佃匂虫の禍なく、高天原は青雲のたなびく極み、天の血垂り飛鳥の災なく、堀固めたる柱桁梁戸牖の錯ひ動き鳴ることなく、引結べる葛目の緩び、取葺ける草の噪ぎなく、御床繼の喧ぎ、童女のいすゝぎいづゝしきことなく、平けく安らけく護りたてまつる神の御名を白さく、

屋船久久能智命、屋船豐宇氣比賣命と御名をば稱奉りて、皇御孫命の御世を堅磐常磐に護りたてまつり、五十樀御世の足御世に手長の御世と幸へたてまつるによりて、言壽鎮めたてまつることの漏遺ちむことをば、神直日命大直日命聞直し見直して、平けく安らけく知しめと白す。

火迦具土神

伊弉那岐伊弉那美命妹妹二柱の神、此く八百萬の神を生みまた萬物を生みたまひて、最後に火神を生みたまふ。御名を火產靈神、また火迦具土神、また火之燒速男神、また火炫毘古神と申したてまつる。

伊邪那美命は火神を生みたまふによりて、御身を燒かれて遂に死にたまへり。其病臥し苦みたまふ時に、其吐出したまへる物によりて、化出てたまふ神を金山毘古神と申し、次に化生てたまふ神を金山毘賣神と申したてまつる。此二柱の神は金山の神なり。次に其御尿により て、彌波能賣神化生てたまふ、此神は水の神なり。また其御屎によりて化生てたまふ二柱の神を埴安彥神と申し、埴安姫神と申し、亦の御名を

健埴安神とも、埴山毘賣神とも、丹生都比賣神とも、丹保都姫神とも申したてまつる。此神は土の神なり。

伊邪那美命また匏を生みたまひ、また川菜を生みたまひて後に、遂に神避りたまひて隱れたまへり。此く水の神と土の神を生み、また匏川菜を生みたまひしゆえは、火の神の御心荒びたまはん時、鎭めしめたまはん爲に生みたまへり。其生みたまひし匏は、天之吉葛と云ふ。

鎭火祭祝詞

高天原に神留坐す皇親神魯岐神魯美の命もちて、皇御孫命は豐葦原の水穗國を、安國と平げく知しめせと、天下寄さしたてまつりしときに、事寄さしたてまつりし天津詞之太詞言をもちて白さく、

神伊邪那岐伊邪那美命妹背二柱嫁繼たまひて、國乃八十國島乃八十島を生みたまひ、八百萬の神等を生みたまひて、眞弟子に火產靈神

を生みたまひて、御陰燒かれて石隱りまして、夜は七夜晝は七日吾を見たまひそ、吾奈妖命と申したまひき。

此七日には足らずして、隱りますこと、奇しとて見そなはすとき、火を生みたまひて、御陰を燒かれましき。

此かる時に、吾名妖命の吾を見たまふなと申すを、吾を見あはたしたまひつと申したまひて、吾名妖命は上津國を知しめすべし、吾は下津國を知らむと白して、石隱りたまひて、黃泉枚坂に至りまして思ほしめさく、吾名妖命の知しめす上津國に、心惡き子を生みおきて來ぬと宣りたまひて、返りまして、更に御子生みたまひ、水神、匏、川菜、埴山姫四種の物を生みたまひて、此の心惡き子の心荒びそば、水神は匏をも、埴山姫は川菜をもちて、鎭めたてまつれと事敎へ悟したまひき。

此によりて稱辭竟へたてまつらば、皇御孫命の朝庭に御心いちはやびたまはじとして、献る物は、明妙照妙和妙荒妙五色のものを備へたてまつりて、青海原に住むものは鰭乃廣物、鰭乃狹物、奥津藻菜、邊津藻菜に至るまでに、御酒は顯の邊高知り、顯の腹滿雙べて、和稻荒稻に至るまでに、横山の如置きたらはして、天津祝詞乃太祝詞事をもちて、稱辭竟へたてまつらくと白す。

豐宇氣比賣神

火の神火產靈神生れたまひて後に、埴山姫神に遇ひたまひて、稚產靈神を生うたまふ。此神の御子を豐宇氣比賣神と申し、亦の御名を宇氣母智神と申し、また大宜都比賣神とも、宇迦之御魂神とも、豐宇迦能賣神とも、御膳都神とも申したてまつる。伊勢の外宮に鎭ります大神なり。

稚產靈神の御頭に蠶と桑と生り、其御臍の中に五種の穀物生れり。

御子豐宇氣比賣神は穀物の神なり。

廣瀨大忌祭祝詞

廣瀨の川合に稱辭竟へたてまつる。

皇神の御名を白さく、御膳持たする若宇加乃賣命と御名は白して、此皇神の前に稱辭竟へたてまつらく、皇御孫命の宇豆の幣帛を捧げもたしめて、稱辭竟へたてまつらくを、神主祝部等諸聞しめせと宣る。

奉る宇豆の幣帛は、御服は明妙照妙和妙荒妙五色の物、楯戈御馬、御酒は瓮、の邊高知り、瓮の腹滿雙べて、和稻荒稻に、山に住む者は、毛の和物毛の荒物、大野の原に生るものは甘菜辛菜、靑海原に住むものは鰭乃廣物鰭乃狹物、奥津藻菜邊津藻菜に至るまで、置足はしてたてまつらくと、皇神の前に白したまへと宣る。

此く奉る宇豆の幣帛を、安幣帛の足幣帛と、皇神の御心も平らけく安らけくきこしめして、皇御孫命の長御膳の遠御膳と、赤丹の穗にきこしめさむ、皇神の御料田をはじめて、親王等王臣等、天下の公民の取作る奥津御歲は、手肱に水沫畫垂り、向股に泥土畫寄せて、取作らむ奥津御歲を、八束穗に皇神の成し幸へたまはゞ、初穗は汁にも穎にも、千稻八千稻に引居えて、横山のごと打積置きて、秋祭にたてまつらむと、皇神の前に白したまへと宣る。

倭國の六の御縣の山口に坐す皇神等の前にも、皇御孫命の宇豆の幣帛を、明妙照妙和妙荒妙五色の物、楯戈に至るまで奉る。

此くたてまつらば、皇神等の敬きます山々の口よりさくなだりに下したまふ水を、甘水と受けて、天下の公民の取作れる奥津御歲を、惡き風荒き水にも逢はせず、汝命の成し幸へたまはゞ、初穗は汁にも穎

にも、頭の邊高知り、頭の腹滿雙べて、横山のごと打積置きてたてまつらむと、皇神の前に稱辭竟へたてまつらまくを、神主祝部等諸聞しめせと宣る。

天之尾羽張

伊邪那美命火の神を生みたまひて、御身を燒かれて死にたまふ時に、伊邪那岐命驚き悲みたまひ、「愛しき我那邪妹命や、子の一柱に易へつるかも、」とのたまひて、伊邪那美命の御枕邊に匍匐ひ、御足邊に匍匐ひて哭きたまひしかば、其御涙によりて化生でたまへる神あり、御名を泣澤女神と申したてまつる。後に香山の畝尾の樹の下に鎮りたまへり。

伊邪那岐命遂に其佩きたまへる十拳劍を拔きて、御子迦具土神の御

頸を斬りて、三段に切成したまふ時に、三柱の神化生でたまふ。其一段に化りたまへる神を大雷神と申し、其次の一段に化りたまへる神を大山祇神と申し、また其次の一段に化りたまへる神を高淤加美神と申したてまつる。高淤加美神は水の神なり、大山祇神は山の神なり、大雷神は雷の神なり。

其殺されたまひし火産靈神の御頭に成りたまへる神を正鹿山津見神と申し、御胸に成りたまへる神を淤縢山津見神と申し、御腹に成りたまへる神を奥山津見神と申し、御陰に成りたまへる神を闇山津見神と申し、左の御手に成りたまへる神を志芸山津見神と申し、右の御手に成りたまへる神を羽山津見神と申し、左の御足に成りたまへる神を原山津見神と申し、右の御足に成りたまへる神を戸山津見神と申したてまつる。此八柱の山の神は、迦具土神の御骸に化生でたまへる神なり。

其十拳劍の刃より垂落る血、高天原の天之安河の河原なる五百箇磐石に激走りつきて、化生てたまへる神を、磐拆神と申し、次に化生てたまへる神を根拆神と申したてまつる。此二柱の神の御子磐筒之男神磐筒之女神妹妹二柱の神は、經津主神の御祖なり。

また其御刀の本より垂落る血も、五百箇磐石にたばしりつきて、神化生てたまふ。御名を甕速日神と申し、此神の御子を熯速日神と申したてまつる。熯速日神は建御雷神の御祖なり。

高淤加美神はまた闇淤加美神とも、闇罔象神とも申したてまつる、貴船に鎮ります神なり。

其斬りたまへる十拳劍の名を天之尾羽張といふ、また伊都之尾羽張神とも、稜威之雄走神とも申したてまつる、天之安河の河上なる天之岩窟に坐ます神なり。

黄泉枚坂

伊邪那美命火の神を生みたまひて、燒きつかれて死にたまひて、遂に神避りまして、黄泉國に隱れたまひて後に、伊邪那岐命其妹伊邪那美命を相見んと欲して、黄泉國に追行きたまへり。

此くて伊邪那美命その御殿の腰戸より、出向ひたまふ時に、伊邪那岐命其狀を見たまへば、此國に生きて坐ませし時の狀に異らず、共に語りたまふ。伊邪那岐命其とき、「愛しき吾那邇妹命、吾と汝と作りし國、未だ作り竟へずあれば、疾く還りたまふべし。吾獨いかで作らん。汝を悲み思ふが故に、今遠く尋ね來つ」と伊邪那美命に白したまへば、伊邪那美命答へて、「悔しきかも、吾那勢命の疾く來たまはぬによりて、吾は既に黄

泉國の穢の物を喫ひつ。此く黄泉國の穢の物を喫ひたれば、還ることを得じ。然れども愛しき吾那勢命の吾を悲み思ひて、遠く尋ねて來ませること可畏ければ、先づ具さに黄泉國の大神と相語らはん。其間は吾を見たまふこと勿れ」とのたまひて、また其御殿の内に還り入りたまへり。

其間甚久しかりしかば、伊邪那岐命待ちかねたまひて、左の御髻に刺したまへる湯津爪櫛を取りて、其男柱一個引闕ぎて、一片火を燭して、入りて見たまへば、伊邪那美命の御身悉く蛆たかれ、腐爛とろゝぎて、御頭には大雷居り、御胸には火雷居り、御腹には黒雷居り、御陰には折雷居り、左の御手には稚雷居り、右の御手には土雷居り、左の御足には鳴雷居り、右の御足には伏雷居り、合せて八つの雷公其御身に成り居たり。

伊邪那岐命見て驚きたまひ、「吾は意はず、あな凶悪しこめき汚穢き國

に到りたり」とのたまひて、急ぎ逃げ歸らんとしたまふ時に、伊邪那美命恥ぢうらみたまひて、「吾を見たまふなと白せしに、聞きたまはず、吾を見たまひて、吾に恥見せたまひて、吾姿を見たまひたれば、吾もまた愛しき吾那勢命の姿を見んとのたまへば、伊邪那岐命また慚ぢたまひて逃げ出でんとして、直ちに歸りたまはず、「吾と汝と相離れん、吾汝に負けじ」とのたまひて、乃ち唾きしたまひ、また打掃ひたまひて、急ぎ還りたまへり。

其唾きしたまふ時成りたまへる神を速玉之男神と申し、其打掃ひたまふ時成りたまへる神を黄泉事解之男神と申したてまつる。

然る時に伊邪那美命黄泉醜女といふ者八人を遣して、伊邪那岐命を追はしめたまふ。伊邪那岐命乃ち佩きたまへる十拳劒を拔きはなちて、後方に揮りつゝ逃げたまひて、黒き御髮を取りて投棄てたまひしかば、蒲萄子化出でたり。黄泉醜女これを拾ひとりて喫ふ。其喫ふ間に

逃けたまふ。黄泉醜女喫ひ了りて、また追ひしかば、乃ち右の御髮に刺したまへる湯津爪櫛を引闕きて投棄てたまへば、筍子化生てたり。黄泉醜女またこれを拔きとりて喫ふ。其喫ふ間に逃げたまふ。黄泉醜女喫ひ了りて、また追ひくる時に、伊邪那美命また八つの雷公神に千五百の黄泉軍を副へて、伊邪那岐命を追はしめたまへり。

伊邪那岐命十拳劍を後方に揮りつゝ、逃げたまひて、大なる樹に向ひて尿したまひしかば、其御尿忽ちに巨川になる。黄泉軍と醜女と此川を渡らんとする間に、伊邪那岐命遠く逃げたまひて、黄泉枚坂に到りまして其坂の桃樹の下に隱れ立ちたまひて、其桃子三箇を採りて待擊ちたまひしかば、雷公神と黄泉軍と皆悉く逃返れり。

伊邪那岐命甚く歎びたまひて、「汝吾を助けしが如く、葦原之中國に有らゆる顯見き青人草の苦瀕に落ちて惚苦まんとき助けよ、」と其桃子に

のたまひて、意富加牟豆美命といふ名を賜へり。

然る後に伊邪那美命自ら追來たまひしかば、伊邪那岐命乃ち其黄泉枚坂の坂下に待迎へたまひて、千引磐石を其坂路に引塞ぎて、妹背二柱の神其磐石を中に置きて、相離別れたまふ時に、伊邪那美命のたまはく、「愛しき吾那勢命、此くしたまはゞ、吾那勢命の知しめす國の青人草一日に千頭絞り殺さん、」とのたまへば、伊邪那岐命答へて、「愛しき吾那邇妹命、汝しか爲たまはゞ、吾は一日に千五百産屋立てん、」とのたまへり。此くのたまひて其御杖を投棄てたまひてまた、「此より内に還り來たまふな、」とのたまひしかば、伊邪那美命とゞまりたまへり。

其時伊邪那岐命「吾はじめに悲み思ひ、忍びず喫きしは甚怯くありけり、」とのたまひしかば、伊邪那美命聞きて、黄泉道守者に託けて、「吾と汝と既に國を生みたり、更に生まんと願はず。吾は此國に留りて、共に還る

ことをせじ」と白さしめまたふ。菊理比賣神もまた其ことを白したまひしかば、伊邪那岐命聞きて歡ひたまへり。

此くて伊邪那美命は遂に黄泉國に留りたまひ、黄泉大神と成りたまへり。また伊邪那岐命を追及きたまひしによりて、道敭大神とも申したてまつる。また其黄泉枚坂に塞ぎし磐石は道反大神と申し、また塞坐豫美戸大神と申したてまつる。

黄泉枚坂は今の出雲國の伊賦夜坂なり。

障神

伊邪那岐命の黄泉枚坂にて投棄てたまへる御杖に成りたまふ神を、衝立船戸神と申し、亦の御名を久那斗神とも岐神とも申したてまつる。

八衢に塞がりまして、悪しきものゝ來るを防ぎたまふ神なるによりて、また八衢比古八衢比賣神とも申したてまつる。所謂障神なり。

道饗祭祝詞

高天原に事始めて、皇御孫命と稱辭竟へたてまつる。

大八衢に湯津磐村の如く塞ります皇神等の前に白さく、八衢比古八衢比賣久那斗と御名は申して、稱辭竟へたてまつらくは、根國底國より荒び疏び來むものに、相まじこり相口會ひすることなくて、下行かば下をまもり、上往かば上をまもり、夜のまもり日のまもりに守りたてまつり齊ひたてまつれと、進る幣帛は明妙照妙和妙荒妙に備へたてまつり、御酒は瓮の邊高知り、瓮の腹滿雙べて、汁にも顆にも、山野に住むものは毛乃和物毛乃荒物、青海原に住むものは鰭乃廣物鰭乃狹物奥津藻菜邊津藻菜に至るまでに、横山の如く置足はして、たてま

つる宇豆乃御幣を、平らけく聞しめして、大八衢に湯津磐村の如く塞がりまして、皇御孫命を堅磐常磐に齊ひたてまつり、茂御世に幸へたてまつりたまへと申す。

橘之小門檍原

伊邪那岐大神黄泉國より還りたまひて後に、其黄泉國に到りたまひしことを悔ひたまひて、「吾はあな凶惡しこめき汚穢き國に到りたり。然れば御禊して、吾身の汚穢を滌ぎはらひ、洗ひ淨めん、」とのたまひて、其御禊したまふべき地を求めて、先づ阿波の門に到り、また速吸の門に到りて見たまへは、潮流甚く急し。此によりて、「此二つの門は潮流いたく急し、」とのたまひて、筑紫の日向の橘之小門之檍原に到りたまふ。

伊邪那岐命此ところにて御禊せんと思ひて、先つ其御身に著けたまへる物を投棄てたまひしかば、其物によりて十二柱の神化生てたまへり。其投棄てたまへる御杖に成りたまふ神を衝立船戸神と申し、次に投棄てたまへる御帶に成りたまふ神を道之長乳齒神と申し、次に投棄てたまへる御囊に成りたまふ神を時置師神と申し、次に投棄てたまへる御衣に成りたまふ神を和豆良比能宇斯神と申し、次に投棄てたまへる御褌に成りたまふ神を道俣神と申し、次の投棄てたまへる御冠に成りたまふ神を飽咋之宇斯神と申し、次に投棄てたまへる左の御手の手纏に成りたまふ三柱の神を奥疎神と申し、奥津那藝佐毘古神と申し、奥津甲斐辨羅神と申し、次に投棄てたまへる右の御手の手纏に成りたまふ三柱の神を邊疎神と申し、邊津邊藝佐毘古神と申し、邊津甲斐辨羅神と申したてまつる。すべて伊邪那岐命の御身に著けたまへる物を

脱棄てたまひしによりて、化生てたまふ神なり。

伊邪那岐命こゝに、「上つ瀬は瀬早し、下つ瀬は瀬弱し」とのたまひて、初めて中つ瀬に降り立り潜りつゝ滌ぎたまふ時に、化生てたまふ神を八十禍津日神と申し、また大禍津日神と申したてまつる。汚穢き黄泉國に到りましゝ時の汚垢によりて化生てたまへる神なり、萬の禍ごとは、すべて此神の御所爲なり。

次に其禍を直さんとして吹出したまふ時に化生てたまへる神を大直毘神と申し、また神直日神と申し、次に化生てたまへる神を伊豆能賣神と申したてまつる。また瀬織津比賣神氣吹戸主神速秋津比賣神速佐須良比賣神を吹出したまふ、此四柱の神は、後の世の大祓に、天下に成りいてたる萬の罪を祓ひ清め、持失ひ掃ひやりたまふ神なり、祓戸神と申したてまつる。

二柱の直日神は萬の禍事を直したまふ神なり、伊豆能賣神は其汚穢を淨めたまふ神なり、また水戸神とも申したてまつる。

伊邪那岐命次に水底に沈み滌きたまふに、吹出したまへる神を底津綿津見神と申し、次に化生てたまへる神を底筒之男命と申し、水の中に潜り滌ぎたまふ時に吹出したまへる神を中津綿津見神と申し、次に化生てたまへる神を中筒之男命と申し、水の上に浮び滌きたまふ時に吹出したまへる神を上津綿津見神と申し、次に化生てたまへる神を上筒之男命と申したてまつる。

此三柱の海津綿津見神は、筑紫の志加の大神なり。また其底筒之男中筒之男上筒之男三柱の神は、住吉の大神なり。

伊邪那岐命次に左の目を洗ひたまふ時に、成りたまへる神を撞賢木嚴之御魂天疎向津比賣命と申し、亦の御名を天照大御神と申し、また大

日靈命とも申したてまつる。次に右の御目を洗ひたまふ時に成りたまへる神を月夜見命と申し、次に御鼻を洗ひたまふ時に成りたまへる神を健速須佐之男命と申したてまつる。

三柱貴子

天照大御神月夜見尊素戔嗚尊三柱の御子生れたまひし時に、伊邪那岐命いたく歡喜びたまひて「吾は子生みて生みはてに、三柱の貴子を得たり」とのたまひて、乃ち御頸珠の玉の緒を取りて天照大御神に授けたまひて、「汝は高天原を知しめしたまふべし」と敕へたまふ。其御頸珠の名を御倉板擧之神と申したてまつる。天照大御神の御身麗しく光りかゞやきて、天地に照徹れり。月夜見尊の御身もまた天照大御神に亞

ぎて、麗しく輝きしかば、また天照大御神と共に高天原に坐まして、夜之國を治めしめまた青海原をも知らしめたまふ。

此時天と地と相離るゝこと未だ遠からざりしかば、天之御柱により て、天照大御神月夜見尊二柱の神を高天原に送り上げたてまつれり。

素戔嗚尊は強く健き神に坐ませしかば伊邪那岐命乃ち素戔嗚尊を天下の主に爲したまひて、たま青海原の潮の八百路を知らしめ、根之國底之國を治めしめたまへり。

根之國底之國は青海原の潮の八百路の彼方にあり、また根之堅洲國と云ふ。

此くて後に、伊邪那岐命は高天原に還り上りたまへり。

月夜見尊

天照大御神高天原に坐まして、月夜見尊に敎へたまはく、「豐葦原中國に宇氣母智神と申す神あり、汝月夜見尊往きて見たまふべし、」とのたまひしかば、月夜見尊乃ち天照大御神の敎へたまひしまゝに、高天原より天降りして、豐葦原中國に到りて見たまへば、まことに保食神あり。

月夜見尊食物を保食神に乞ひたまへば、保食神乃ち頭を廻らして國に向ひたまふ時に、御口より飯出てたり。また頭を廻らして海に向ひたまへば、御口より鰭乃廣物鰭乃狹物出て、また頭を廻らして山に向ひたまへば、御口より毛乃荒物毛乃和物出てたり。また鼻口尻より種々の美味を取出して、百几の机に種々作具へて、月夜見尊にたてまつりた

まふ時に、月夜見尊ひそかに其態を立伺ひたまひて、汚穢き物をたてまつりたまふと思しめして、忿りたまひて、「穢はしきかも、鄙きかも、何故に此く汚穢き物を以て、吾を養はんとはするぞ、」とのたまひて、乃ち其劍を拔きて保食神を擊殺したまひて、また高天原に還りのぼりて、天照大御神に具に其ことを白したまへり。

天照大御神聞きて甚く怒りたまひ、「汝は惡き神なり、汝と相見るを願はず、」とのたまひて、其時より一日一夜隔り離れて住みたまへり。

然る後に天照大御神また天熊之大人を遣して見せしめたまへば、保食神まことに既に死にたまへり。然れども殺されたまへる保食神の顱の上に粟生り、眉の上に蠶と桑と生り、目に稗生り、腹に稻なり、陰に麥なり、尻に豆なり、頂に牛馬化生でたり。

天熊之大人悉く取りて、高天原に持上りて、天照大御神にたてまつり

しかば、天照大御神喜びたまひて、「此物は顯しき天下蒼生の食ひて活くべきものなり、」とのたまひて、乃ち粟稗麥豆を陸田の種子と定め、稻を水田の種子と定めたまひ、また天邑君を定めて其稻種を天之狹田天之長田に殖えしめたまひしかば、其秋に垂穂八束に實りしげりたり。

また天香山に桑を殖えて蠶を養ひ、其繭を口に含みて絲を抽きしによりて、養蠶紝織の業はじまれり。

素戔嗚尊

天照大御神月夜見尊二柱の神各々伊邪那岐命の敎へたまひしまゝに、其國を治めたまへる中に、素戔嗚尊は其知しめすべき國を知しめさず、八拳鬚胸前に至るまで、哭きたまへり。此く哭きたまひしかば、青山

を悉く枯山に泣枯し、河海を悉く哭乾したまへり。此によりて青人草多く死に傷はれ、荒振神多く起りて、萬の物の妖こと〳〵く發れり。

伊邪那岐命素戔嗚尊に、「何によりて汝は其國を知しめさず、此く哭きたまふぞ、」と問ひたまへば、素戔嗚尊答へて、「吾は妣の國根之堅洲國に往かんと思ふがゆゑに、此く哭くなり、」と白したまふ。伊邪那岐命聞きて太く怒りたまひて、「然らば汝は此國には住みたまふべからず、此國を治めたまはゞ、此國は遂に傷はれなん。疾く根之國に罷りたまふべし、」とのたまひて、素戔嗚尊を此國より追ひたまふ。然れども素戔嗚尊尙疾く往きたまはず、「吾は先つ高天原に到りて、天照大御神に過ひたてまつりて後に、根之國に罷らん、」と請ひたまひしかば、伊邪那岐命許したまふ。素戔嗚尊乃ち高天原に上りたまふ。

天之眞名井

素戔嗚尊の高天原に昇らんとしたまふ時に、櫛明王命と云ふ神あり、途に素戔嗚尊を迎へたてまつりて、瑞八坂瓊之曲玉を献つる。素戔嗚尊其瓊玉を持ちて昇りたまふ時に、健き神に坐すによりて、渤海とゞろき盪ひ、山川動み國土震りたり。

天之宇受賣命見て其狀を天照大御神に告げたてまつりしかば、天照大御神もとより素戔嗚尊の健くましますことを知りたまへば、其今昇り來たまふことを聞きたまひ、また其狀を見たまひて、驚き怒りたまひて、「吾那勢命の上りきますこと、いかで善き心あらん、必ず吾治しめす高天原を奪はんと思ひて昇りたまふにこそ、父の大神既に諸の御子等に

各々其治しめすべき國を分ち授けたまへるに、何故に吾那勢命は其治しめすべき國を棄てたまひて、吾國を窺はんとはしたまふぞ、」とのたまひて、乃ち御髮を解きて御髻に纏ひ、御髮を結ひて御髮になし、御裳を引まとひて、御袴になし、左右の御髮に八尺瓊の五百箇御統之珠を纏ひ、左右の御手にもまた八尺瓊の五尺箇御統之珠を纏き、背には千箭の靫また五百箭の靫を負ひ、臂には稜威之高鞆を佩き、弓弭ふりたて劒の柄としばりて、此く益荒夫の姿に成りたまひて、「吾手弱女なれども如何で避けん、」とのたまひて、堅庭かたく踏みかためて、向股深く踏み入りて、沫雪の如く蹶散して、稜威の男健び踏みたけびて、「何故に此くは上り來ませるぞ、」と問ひたまふ。

素戔嗚尊答へて、「吾はもとより邪惡き心なし。父の大神吾哭く理由を問ひたまひしゆえに、妣之國根之堅洲國に往かんと思ひて哭くなり

と答へしかば、父の大神怒りたまひて、然らば汝は此國には住かじ、疾く根之國に罷れとのたまひて追ひたまひしかど、一度姉命を相見て後にこそと思ひて、父の大神の御許を得たれば、今昇りたるなり。また珍寶八坂瓊之曲玉を捧げたてまつらんと思ひて、遠く雲霧を跋渉りて上り來たるなり。此く姉命の怒りたまはんとは思はざりき、吾もとより惡き心なし、」とのたまふ。天照大御神聞きて尚疑ひたまふ御心あり、「然らば何によりて汝が心の清く明く坐すことを知らん、」と問ひたまへば、素戔嗚尊答へて、「各々誓約ひて子生まん、もし吾生める子女神ならば、濁き心ありと思ひたまふべし、もし男神ならば清き心ありと知りたまふべし、」とのたまふ。

乃ち天之眞名井三處を堀たまひて、天照大御神と素戔嗚尊と共に天之安河を中に置きて相對ひ立ちたまひて、天照大御神先づ素戔嗚尊の

佩きたまへる十拳劍を乞ひ取りて、三段に打折りて、天之眞名井に振滌ぎて齧然咀嚼て吹棄てたまふ御氣息の狹霧の中に化生てたまふ三柱の女神を多紀理比賣命と申し、亦の御名を奥津島姫命と申し、次に狹依比賣命と申し、亦の御名を市寸島姫命と申し、次に多岐津比賣命と申し、亦の御名を湍津島姫命と申したてまつる。

素戔嗚尊次に天照大御神の左の御髻に纏きたまへる八坂瓊之五百箇御統球を乞ひとりて天之眞名井に振滌ぎて齧然咀嚼て吹棄てたまふ御氣息の狹霧の中に男神一柱化生てたまひしかば、素戔嗚尊乃ち與言して、「正哉吾勝てり、」とのたまひしによりて、此御子の御名を正哉吾勝勝速日天之忍穗耳命と申したてまつる。次に右の御髻に纏きたまへる御統珠を乞ひとりて天之眞名井に振滌ぎて齧然咀嚼て吹棄てたまふ御氣息の狹霧の中に化生てたまへる神を天之穗日命と申し、次に御

髻に纏きたまへる御統球を乞ひとりて天之眞名井に振滌ぎて齧然咀嚼て吹棄てたまふ御氣息の狹霧の中に化生でたまへる神を天津日子根命と申し、次に左の御手に纏きたまへる御統珠を乞ひとりて天之眞名井に振滌ぎて齧然咀嚼て吹棄てたまふ御氣息の狹霧の中に化生でたまへる神を活津日子根命と申し、次に右の御手に纏きたまへる御統珠を乞ひとりて天之眞名井に振滌ぎて齧然咀嚼て吹棄てたまふ御氣息の狹霧の中に化生でたまへる神を熊野久須毘命と申したてまつる。

天照大御神此によりて素戔嗚尊のもとより邪惡き御心坐まさずと云ふことを知りたまひて、「此後に生まれし五柱の男神は吾物によりて成りたまへば、もとより吾子なり。先に生まれし三柱の女神は汝の物によりて成りたまへば、おのづから汝が子なり」と別けたまひて素戔嗚尊に授けたまひ、五柱の男神は天照大御神みつから取りて養ひたまへ

り。

天照大御神わけて正哉吾勝勝速日天之忍穗耳命を鐘愛みたまひて、常に御腋に懷きて育てたまへり、此によりて此神を腋子と申したてまつる。

三柱の女神は後に筑紫の胸形に鎮りたまふによりて、胸形之大神と申したてまつる。奥津島姫命は胸形の奥津宮に坐まし、市寸島姫命は胸形の中津宮に坐まし、湍津島姫命は胸形の邊津宮に坐ます。此三柱の宗像の大神高天原より降りて埼門山に居たまひし時に、青菰玉を以て奥津宮の表に置き、八坂瓊之紫菰玉を以て中津宮の表に置き、八咫鏡を以て邊津宮の表に置きて、此三つの表を神體として三つの宮に納めかくしたまひしによりて、身形の宮と申したてまつる。また筑紫の宇佐に降りたまひ、北の海の道に留りたまへり。

天津罪

素戔嗚尊五柱の男神を生みたまひし後に、「吾心清く明きゆゑに吾は男神を生めり。此によりて云はゞ、自ら吾勝ちぬ、」とのたまひて、また健き心を起して荒びたけびたまふこと暫くも止むときなし。

天照大御神天之垣田を作りたまふ、また御田三處あり、天之安田天之平田天之邑并田といふ、皆良き田なり、霖雨旱天つゞけども損傷はるゝことなし。素戔嗚尊の御田もまた三處あり、天之槻田天之川依田天之口鋭田と云ふ、皆磽地なり、霖雨降れば流れ旱天すれば焦けたり。素戔嗚尊此によりて天照大御神を妬み思ひたまひて、春は姉神の營りたまへる御田の畔を毀ち、溝を埋め、樋を放ち、また其御田に頻蒔し、秋は其御

田の稲すでに實れる時に天之斑駒を放ちて其中に伏せしめ、また絡細を引渡し籤を刺したまふ。また天照大御神の新嘗きこしめす時に、其新宮の御席の下に陰に放尿し糞まりちらしたまふ。天照大御神其ことを知りたまはず、直に其御席の上に坐りたまへば悉く御身を汚したまふ。

素戔嗚尊此くしたまへども、天照大御神恩愛の御心を以て咎めたまはず、また恨み怒りたまはず、「屎まりたまふは醉ひて吐散したまふにこそ、また田の畔放ち溝埋めたまふは悉く田にせんとて吾那勢命の此くはしたまふにこそ、」とのたまひしかども、素戔嗚尊尚其惡き態を止めたまはず荒びたけびたまふ。

天照大御神忌服殿に坐まして神御衣織りたまふ時に、素戔嗚尊其御服屋の棟を穿ちて、天之斑駒を生剝逆剝に剝ぎて、其穿ちたまへるとこ

ろより墮し入れたまひしかば、天照大御神驚きて梭を以て御身を傷めたまへり。また天照大御神の御妹稚日女命も驚きて機より墮ち、其持ちたまへる梭を以て乳を衝きて死にたまへり。

天照大御神此によりて大く怒りたまひて、「汝尚黑き心あり、相見るを願はず」と素戔嗚尊にのたまひて、天之窟に入りたまひて、其窟戸を閉したてゝ幽れたまへり。

素戔嗚尊の高天原に坐まして犯したまへる此種々の罪を天津罪といふ、後の世の六月十二月の大祓に祓ひたまひ淨めたまふ罪なり。此く祓ひたまへば祓戸神たち其罪を順次に持ち出て持ち放ち持ち失ひたまひて、悉く祓ひ清めたまふ。

大祓祝詞

集侍れる親王諸王諸臣百官人ども諸聞しめせと宣る。

天皇が朝庭に仕へたてまつる比禮桂る伴男手襁桂る伴男靫負ふ伴男劒佩く伴男伴男の八十伴男を始めて官官に仕奉る人等の過ち犯しけむ雜雜の罪を今年六月晦日の大祓に祓ひたまひ清めたまふことを諸聞しめせと宣る。

高天原に神留坐す皇親神魯岐神魯美の命もちて八百萬の神たちを神集へつどへたまひ神議りはかりたまひて、我皇御孫命は豐葦原乃水穗國を安國と平らけく知しめせと事依さしたてまつりき。

此く依さしたてまつりし國中に荒振神どもをば神問はしにとはしたまひ神掃ひにはらひたまひて、語問ひし磐根樹立草の片葉をも語止めて、天之磐座放れ天之八重雲を稜威の千別きにちわきて、天降し依さしたてまつりし四方の國中と大倭日高見之國を安國と

定めたてまつりて、下津磐根に宮柱太敷立て、高天原に千木高知りて、皇御孫命の瑞之御殿仕へたてまつりて、天之御蔭日之御蔭と隠りまして安國と平らけく知しめさむ國中に成出てむ天之益人等が過ち犯しけん雜々の罪事は天津罪とは畔放ち溝埋め樋放ち頻蒔き串刺し生剝ぎ逆剝ぎ屎戸こゝだくの罪を天津罪と詔別けて、國津罪とは生膚斷ち死膚斷ち白人胡久美己が母犯せる罪己が子犯せる罪母と子と犯せる罪子と母と犯せる罪畜犯せる罪昆虫の災高津神の災畜仆し蠱物せる罪こゝだくの罪出てむ。

此く出てなば天津宮事もちて大中臣天津金木を本打切り末切断ちて千座の置座に置足はして天津菅曾を本刈断ち末刈切りて八針に取りさきて、天津祝詞の太祝詞事を宣れ。

此く宣らば天津神は天の磐門を押開きて天之八重雲を稜威の千

別きにちわきて聞しめさむ、國津神は高山の末短山の末に上りまして高山の雲霧短山の雲霧を撥別けて聞しめさむ。

此く聞しめしてば皇御孫命の朝庭を始めて天下四方の國には罪といふ罪は在らじと、科戸の風の天之八重雲を吹放つことの如く、朝の御霧夕の御霧を朝風夕風の吹掃ふことの如く、大津邊に居る大船を舳解きはなち艫解きはなちて大海原に押放つことの如く、彼方の繁木が本を燒鎌の敏鎌もて打掃ふことの如く、遺る罪は在らじと祓ひたまひ清めたまふことを高山の末短山の末より眞下垂りに落ちたぎつ速川の瀬に坐す瀬織津比咩と云ふ神大海原に持ちいてなむ。

此く持ちいてなば荒鹽の鹽の八百道の八鹽道の鹽の八百會に坐す速開津比咩と云ふ神持ちかゝ呑みてむ。

此く持ちかゝ呑みてば氣吹戸に坐す氣吹戸主と云ふ神根之國底

之國に氣吹放ちてむ。

此く氣吹放ちてば根之國底之國に坐す速佐須良比咩と云ふ神持ちさすらひ失ひてむ。

此く失ひてば天皇が朝庭に仕へたてまつる官官の人どもを始めて天下四方には今日より始めて罪といふ罪はあらじと、高天原に耳振立て聞くものと馬牽立てゝ今年六月晦日の夕日の降の大祓に祓ひたまひ清めたまふことを諸聞しめせと宣る。

四國ト部等大川道に持退りてゝ祓却れと宣る。

天之窟戸

天照大御神素戔嗚尊の惡き御所業を怒りて、「汝は尚惡き心あり、相見

ることを願はず」とのたまひて高天原の天之窟に入りたまひて、其窟の戸を閉したてゝ幽れたまひしかば、高天原忽ちに暗く豐葦原中國また悉く暗くなりて、夜晝の區別なく、萬のこと火を燭して辨へたり。此くなりしかば荒振神多く起りて五月蠅の沸立つ如く萬の妖ことゝく發れり。

此によりて八百萬の神々愁ひ迷ひたまひて、高天原の天之安河の河原に悉く集ひたまひて祈謝りたてまつるべき方を計りたまふ時に、高皇產靈尊の御子常世之思兼神と申したてまつる神あり。思慮の智謀深くまします神なりしかば、高皇產靈神乃ち此思兼神に深く思ひ遠く謀らせたまふ。思兼神乃ち深く思ひ遠く謀りたまひて、「天照大御神の御象を圖造りまた種々の計謀をして祈禱たてまつらん」と白したまへり。

乃ち思兼神の思ひはかりたまひしまゝに、鏡作の祖天之糠戸命の御子石凝姥命に科せて天之安河の河上の天之堅石を取り其名鹿の皮を全剝に剝ぎて天之羽鞴を作り天之香山の銅鐵を採りて、鍛人天津麻羅と云ふ者を召し求めて此天之羽鞴を以て日神の御像の鏡を作らしめたまふ。初めに作りし鏡は神々の御心に適はず、紀國に坐ます日前國懸大神なり。次に作りし鏡は八咫鏡と云ひ、また眞經津鏡と云ふ、其狀美麗しかりき、伊勢の大神宮に坐ます。

次に天之目一箇命に科せて、雜々の刀斧鐵鐸を作らしめたまふ。此天之目一箇命は倭鍛冶等が祖なり。

天之日鷲命に科せて穀木を植えて白和幣を作らしめ、長白羽命に麻を植えて青和幣を作らしめたまふ、其穀木と麻と一夜の間に茂れり。また天之羽槌雄命に文布を織らしめ、天之御桙命を司とし天之八千々

比賣命を織女として神衣を織らしめたまふ。文布は後の世に荒妙と云ひ、神衣は和衣なり。其天之八千々比賣命はまた天之棚機姫命と云ふ、長白羽命は漆績連の祖なり、天之御桙命は服部連の祖なり、後の世の神衣祭は此時より始れり。

手置帆負命彦狹知命に科せて天之御量もち齊斧もちて大峽小峽に立てる木を伐りて齊鉏もちて齊柱立てて瑞之御殿を造らしめまた御笠矛盾を造らしめたまふ。

天之櫛明玉命に科せて八坂瓊之勾玉之五百箇御統之珠をつくらしめ、山雷神に科せて天之香山の五百枝眞賢木の八十玉串を採らしめ、野槌神に科せて五百枝野籌の八十玉串を採らしめたまふ。

此く諸の神たちに科せて種々の物を造らしめ種々設け備へたまひて後に、天之兒屋根命天之太玉命二柱の神を召して、天之香山の眞男鹿

を生捕りて其肩を全抜にぬぎて放ちやり、天之香山の天之朱櫻木を採りて其肩の骨を焼きてトはせたまひしかば、御ト占謀事に合へり。鹿の御ト占は此時よりはじまれり。

此く御ト占合ひしかば天之兒屋根命天之香山の五百枝眞賢木を根抜にこじて、上枝には天之櫛明玉命の作りし八坂瓊之曲玉之五百箇御統之珠を取着け、中枝には石凝姥命の作りし八咫鏡を取繋け、下枝には天之日鷲命の作りし由布を取垂てゝ、此種々の物を天之太玉命太御幣帛と取持ちて、天之兒屋根命太祝詞言禱ぎ白して神祝ぎほさぎたまふ。

また常世之思兼命の思ひはかりたまひしまゝに常世之國の長鳴鳥を集めて互に長鳴きに鳴かしめて、天之手力雄命天之窟の窟戸の側に隠れ立ちて、天之宇受賣命を神樂の長として、天之香山の竹を採り其節間に孔を彫りて吹鳴し木と木と打合せて樂の聲に和せて、天之加奈止

美命天之香弓六張おきならべて、長白羽命左右の手に茅と管とを持ちて奏る時に、黄金色の鵄飛來て其弓弭の上に止れり。

此に天之宇受賣命天之香山の天之日蔭を鬘となし、天之香山の天之眞拆を手次に繋きて、天之香山の小竹葉を手草に結ひて、鐸着けたる矛を手にもちて、天之窟戸の前に庭燎を擧げて、宇氣槽伏せて其上に踏みとゞろかし巧に俳優して神懸りして、

「比登布多美用
伊都牟由那那
夜許々能多理
毛々智用呂都」

と云ひて相共に歌ひ舞ふ時に、天之宇受賣命胸乳をかき出し裳の緒を陰に抑垂れしかば、八百萬の神たち皆共に咲ひたまふ、此く咲ひたまひ

しかば高天原震り動めり。

天照大御神此を聞きて御心に異しと思しめしたまひ、また天之兒屋根命の白したまへる廣き厚き稱辭を聞しめして、「此ごろ稱辭白す神多くあれども、未だ此く麗美しき稱辭を白すを聞かず」、とのたまひて、天之窟の窟戸を細目に開けて、「吾幽り坐すによりて高天原おのづから暗く葦原の國もまた皆闇くあらんと思ふに、何によりて天之宇受賣は樂しまた八百萬の神たち諸咲ふぞ」、と窟戸の内よりのたまへば、天之宇受賣命答へて、「大御神に勝りて貴き神坐ますがゆえに此く歡樂遊ぶなり」、と白したてまつる。此く白したてまつる間に天之太玉命其鏡をさしいだして天照大御神に示したてまつりしかば、天照大御神いよ〳〵異しと思しめして少しく戸より出て、臨坐す時に、其戸の側に隱れ立てる天之手力雄命其窟戸を引開けて、天照大御神の御手を取りて引出した

てまつれば、中臣神天之兒屋根命忌部神天之太玉命日の御綱繩の尻久米繩を天照大御神の御後方に控度して、「此より内に還り入りたまふな」、と白したてまつりて、天照大御神を其新宮に遷したてまつりて、大宮能賣命を其御前に侍らしめ天之石戸別命に其殿門を守衛らしめ、天之太玉命大殿祭御門祭して仕へたてまつれり。

天照大御神天之窟より出でたまひしかば、高天原も豐葦原もまた自ら照明りて八百萬の神たち諸ともに見たまへば、其御面みな白くあり き、乃ち手を伸して歌ひ舞ひたまひて相共に

「阿波禮、
阿那於茂志呂、
阿那多能志、
阿那佐佐憩、

「妖祓、

と唱へたまへり。

天之石門別命の亦の御名を櫛石窓命豐石窓命と申したてまつる、御門の神なり。

大宮能賣命の天照大御神の御前に仕へたてまつりたまふ狀は、後の世の内侍善き言美しき詞を以て君と臣との間を和げて、天皇の御心を悅ばせたてまつるが如し。此によりて大殿祭に屋船命に幣帛をたてまつりたまふ時に、大宮能賣命にもまた幣帛たてまつりて稱辭白さしめたまへり。

大殿祭祝詞

詞別白さく、

大宮能賣命と御名を申すことは、皇御孫命の同殿の裏に塞りまし

て、參入罷出る人の選び知しゝ神等のいすろこひ荒びますを言直し和しまして、皇御孫命の朝の御膳夕の御膳供へたてまつる比禮懸る伴男手纏かくる伴男の手の蹟ひ足の蹟ひなさしめずして、親王諸王諸臣百官人たちを己が乖々あらしめず、邪き意穢き心なく宮進めに進め宮勤に勤めて、咎過あらむをば見直し聞直しまして、平けく安らけく仕へたてまつらしめますによりて、大宮能賣命と御名を稱辭竟へたてまつらまくと宣る。

御門祭祝詞

櫛磐脯豐磐脯命と御名を申すことは、四方内外の御門に湯津磐村の如く塞りまして、四方四角より疎び荒び來む天之麻我都比と云ふ神の言はむ惡事に相まじこり相口會へたまふことなく、上より往かば上をまもり、下よりゆかば下をまもり、待防き掃ひ却け言ひ排けま

して、朝は御門開き夕は御門閉ぢて、參入り罷出る人の名を問ひ知らし、咎過あらむをば神直び大直びに見直し開直しまして、平らけく安らけく仕へたてまつらしめたまふゆえに、豐磐腦命櫛磐腦命と御名を稱辭竟へたてまつらくと白す。

祈年祭祝詞

御門の御巫の稱辭竟へたてまつる。

皇神等の前に白さく、櫛磐間門命豐磐間門命と御名を白して稱辭竟へたてまつらば、四方の御門に湯津磐村の如く塞りまして、朝は御門ひらきたてまつり夕は御門とぢたてまつりて、疎ぶるものゝ下よりゆかば下を守り上よりゆかば上を守り、夜の守り日の守りに守りたてまつるゆえに、皇御孫命の宇豆乃幣帛を稱辭竟へたてまつらくと宣る。

神衣祭祝詞

度會の宇治の五十鈴の川上に大宮柱太敷立てゝ高天原に千木高知りて稱辭竟へたてまつる。

天照坐皇大神の大前に申さく、服織麻績の人等の常も仕へたてまつる和妙荒妙の織の御衣を進ることを申したまふと申す。

荒祭宮にも是く申してたてまつれと宣る。

千座置戸之祓具

天照大御神天之窟より出てたまひし後に、八百萬の神たち共に議りて、素戔嗚尊の犯したまひし諸の罪を祓はしめたてまつらん爲に、素戔嗚尊に千座置戸の祓具を科せて種々の物を出さしめて千座に置き足

はし、また髪鬚手足の爪を拔かしめて、手の爪を手端の吉祭物と爲し足の爪を足端の凶祭物と爲し、唾を白和幣となし洟を青和幣となして、乃ち天之兒屋根命に其解除の太諄辭を宣らしめて、天之小管を割きて打拂ひ拂ひきよめて祓ひ竟へしめて、然る後に八百萬の神たち素戔嗚尊を責めたてまつりて、「汝の所業甚惡く坐ませば、此より後天津國に住みたまふべからず、また葦原の中國にも留りたまふべからず、疾く根之國に罷りたまふべし、」とのたまひて、乃ち共に神逐ひ逐ひくだしたまへり。

素戔嗚尊此く八百萬の神たちに逐はれて高天原より降りたまふ時に霖雨ふりしかば、青草を結び束ねて蓑笠に着て衆神に御宿を請ひたまふ。然れども諸神御宿をかしたまはず、「汝は所業惡きにより逐はれたまへる神なり如何にぞ吾に宿を乞はんとはしたまふぞ、」とのたまひて共に拒みたまひしかば、素戔嗚尊いたく雨ふり風ふけども休みたま

ふことを得ず辛苦みつゝ降りたまふ。

後の世に蓑笠をきて他人の家に入ることを諱み、また束ねたる草を負ひて入ることを諱み、犯す者に必ず解除を出さしむるは、此時にはじまりたる法なり。

素戔嗚尊此く降りたまひしかど、直ちに根之國に往かんことを願ひたまはず、「吾もろ〳〵の神に逐はれて、今永く罷らんとす、然れども一度び吾姉命を相見て後にこそ、如何て直ちに罷らん、」とのたまひて、また高天原に上りたまふ。

天之宇受賣命素戔嗚尊の上り來たまふことを見て天照大御神に告げたてまつりしかば、天照大御神聞きたまひて、「吾那勢命のまたのぼりきませること必ず善き心にあらじ、」とのたまふ時に、素戔嗚尊上り來たまひて、「吾惡き心なし、吾今また上りきしゆえは、衆神吾を根之國に逐ひ

たまへば、今永く去らんとす、然れども姉命を相見ずしては如何て去らん、一度び相見て後にこそと思ひて、實に清き心を以て復のぼり來つるなり。今すでに姉命を相見たてまつりたれば、乃ち神たちの御心のまゝに永く根之國に去らん。姉命は平らけく安らけく高天原の天津御國を知しめしたまふべし、また吾生みおきし子どもは姉命に奉れば愛撫み育てたまふべし、」とのたまひて、また降りたまへり。

豐葦原の巻

五十猛命

素戔嗚尊八百萬の神に高天原を逐はれ、天照大御神を相見たてまつりたまひて後に、天降りしたまひ、御子五十猛命を率ゐて新羅國に到りつきたまひて曾戸茂梨といふところに留りたまへり。

然る後に素戔嗚尊、「吾永く此ところに居るを願はず、」とのたまひて、土を以て舟を作り其舟に乘りて青海原の八重の潮路遠く渡りて東に渡りたまひて出雲國安來の埃の川の川上に到りつきたまひて、「吾心いま安く平らけく成りぬ、」とのたまへり。

素戔嗚尊のたまはく、「韓國の新羅國には黄金あり、また白金あり。吾

御子の知らさん此葦原之中國に海原渡る浮寶なきは佳くあらじ」との たまひて、乃ち御身の毛を拔きて散らしたまふ。御鬚髯を拔きて散らしたまへば杉に化り、御胸毛を拔きて散らしたまへば檜になり、御尻毛を拔きて散らしたまへば柀に化り、御眉毛を拔きて散らしたまへば樟になれり。

此く種々の良き樹なりいてしかば素戔嗚尊乃ち此種々の樹を用ふべき法を定めたまひて、「杉と樟は浮寶に作りて衆人の青海原の八重の潮路を渡らん具となすべし、檜は瑞の宮殿作らん材となすべし、次に柀は顯見き天下蒼生の奥津棄戸にかくれ臥さん家作るべき具となすべし、」とのたまひて各々其法を定めたまひ、また青人草の噉ふべき種々の八十木種も皆悉く播き生したまへり。

御子五十猛命の亦の御名を大屋昆古神と申したてまつる、韓國に到

りたまひしによりてまた韓國乃伊太祁曾神とも申したてまつる。此神高天原より降りたまひし時に樹種を多く持ちて降りたまひしかども、韓國の新羅國には殖えたまはず、悉く持歸りたまひて筑紫國より始めて大八島國の内のこるところなく悉く殖えたまひて青山に成したまへり。此く樹を殖えたまひて貴き神となりたまひしによりて、五十猛命を後に有功之神と申したてまつる。紀國に鎮ります大神なり。

五十猛命の御妹神大屋津比賣命次に柧津比賣命二柱の神もまた樹種を播き殖えたまひて後に、紀國に渡りたまへり。此二柱の神もまた素戔嗚尊の御子に坐ます、紀國の神なり。

八岐大蛇

素戔嗚尊新羅國より東に渡りて出雲國に到りつきたまひて、鐵の河の河上なる鳥上の峯に上りたまへる時に、其河上より箸流れ下れり。素戔嗚尊見たまひて、其河上に人ありと思しめしたまひて、尋ね上りたまへば河上に人の啼く聲きこゆ。乃ち更に其聲を尋ねて上りたまへば、一人の老翁と一人の老媼あり、中間に童女を置きて撫でつゝ泣きゐたり。

素戔嗚尊此老翁と老媼を見たまひて、「汝等は誰ぞ、また何故に汝等は此く哭くぞ、」と問ひたまへば、其老翁答へて、「吾は國神なり、吾名を足名稚と云ひ妻が名を手名椎といふ。此童女は吾等が兒なり、其名を眞髮觸櫛稲田姫と云ふ。また吾等が哭く理由は、吾等が兒はもとより八稚女あり。然るに茲に高志國の八俣大蛇と云ふものあり、年毎に來て吾等が兒を取りて喫ふ、七稚女はすでに取られて、今此童女一人のみ殘れり。

今また其八岐大蛇來て此殘れる童女を取りて喫はんとするが理由に、悲しみて此く哭くなり、」と云ふ。素戔嗚尊聞きて、「其高志國の八岐大蛇の形は如何なる形ぞ、」と問ひたまへば、老翁答へて、「其大蛇は身は一つにして頭八つあり、尾もまた八つあり眼は赤酸醬の如く、其身に羅生ひ其背上に松柏杉檜生ひしげり、其長さ谿八谷峽八尾に渡り、其腹を見れば悉く常に血にただれたり、」と告げたてまつる。

素戔嗚尊また、「其童女汝等が女子ならば、吾にたてまつらんや、」と問ひたまへば、老翁答へて、「可畏けれども、此く申したまふ御神の御名を未だ知りたてまつらず、」と云ふ。素戔嗚尊乃ち、「吾は高天原に天津國知しめす天照大御神の御伊呂勢なり、今高天原より降れり、」と敎へたまひしかば、老翁と老媼と聞きて大く喜びて、「然ましまさば、可畏し、のたまふまゝに童女をたてまつらん、然れども先づ其八岐大蛇を殺したまひて後に

召したまふべし、」と答へたてまつれり。

素戔嗚尊乃ち神術を以て立どころに其童女を美しき湯津爪櫛に取成して御髻にさしたまひて、足名椎手名椎神に敎へたまはく、「汝等疾く衆多の樹果を以て八鹽折乃毒酒を釀し、また垣を造りめぐらし、其垣に八つの門をつくり立て、門毎に八つの棧敷を結ひたて、其さずき毎に各々一口の酒槽を置き、其酒槽に其八鹽折乃酒を盛り、此く具に設けそなへて待つべし、吾必ず其大蛇を殺して童女を助けん、」と敎へたまひしかば、老翁と老媼と其敎へたまひしまゝに酒を釀し垣を作り棧敷を結ひ酒槽に其酒を盛りて遺るところなく設け備へて待つ。

素戔嗚尊此く設け備へしめて待ちたまふ時に、果して八岐大蛇來れり。其狀を見たまへば、老翁の云ひしに違はず、身一つにして頭尾各八つあり、身に蘿生ひ背上に松栢杉檜生ひ八谷八尾に渡りて出來る時に、

眼は赤酸醬の如く腹に血たゞれたり。

素戔嗚尊其時少しも畏れたまはず、「汝は可畏き神なり、いかで御饗せざらんや、」とのたまひて、八甕の酒を其大蛇の口毎に注ぎ入れたまへば、其大蛇乃ち槽毎に頭を垂れて其酒を飲む。此く飲みしかば其大蛇遂に飲醉ひて醉伏して寢たり。

素戔嗚尊その時佩きたまへる十拳劍を拔ぎて其寢たる大蛇を斬りたまひ斬り斬りて寸々に切散りたまへば、簸の川水血になりて流れたり。殺されたる大蛇の骸は斷片毎に雷に化り、すべて八つの雷に化りて空に昇れり。素戔嗚尊其大蛇の尾を斬りたまふ時に、御劍の刃すこし缺けたり。異しと思しめして御劍の鋒を以て大蛇の尾を刺割きて見たまへば、中より一つの劍出てたり、異しき劍なりしかば取りて御許に安置きて祭りたまへり。其大蛇の居たるところの上に常に雲氣あ

りしかば、此劔の名を天之叢雲劔と云ふ。

其大蛇を斬りたまへる劔の名を大蛇之麁正と云ひ、また天之羽々斬劔と云ひ、また天之蝿斫劔とも大蛇韓鋤劔とも云ふ、後の世に石上の神宮に祭る神寶なり。

其後に素戔嗚尊「此天之叢雲劔は神異しき劔なり、吾私に持つべきものに非ず、」とのたまひて御孫子天之菅根命に此劔を持たせて高天原に遣して天照大御神にたてまつらしめたまひしかば、天照大御神見たまひて、「此は吾劔なり、吾窟に幽りしときに近江國の伊吹山に落せし劔なり、」とのたまひて受取りたまへり。

須賀宮

素戔嗚尊八岐大蛇を殺したまひて後に櫛稲田姫を妻としたまひて、宮殿造るべきところを出雲國に求めつゝ須賀といふところに到りたまひて、「吾此に來りて吾心すがゝし、」とのたまひて其地に宮殿造りたまへり。此地を後に須賀といふ。

素戔嗚尊須賀宮を作りたまふ時に、其ところより雲立ちのぼりしかば、歌よみたまふ。

「八雲たつ出雲八重垣妻ごみに
八重垣つくる其八重垣を」

此くて後に其足名椎神を喚したまひて、「汝は吾宮殿の首たれ、」とのたまひて、稲田宮主須賀八耳神といふ名を負はせたまへり。

素戔嗚尊遂に櫛稲田姫命に遇ひたまひて、御子八島士奴美命を生みたまひ、また大山津見神の御女神大市比賣命に遇ひたまひて、大年神を

生みたまひ、次に宇迦之御魂神を生みたまへり。此二柱の神は穀物の神なり。

而して後に素戔嗚尊は熊成峯に座まして、遂にまた根之國に入りてかくれたまへり。

庭津日神座摩之神

大年神の亦の御名を大歳御祖命と申したてまつる。此神神活須毘神の御女伊怒比賣命に過ひたまひて、御子大國御魂神を生みたまひ、次に韓神を生みたまひ、次に曾富理神を生みたまひ、次に白日神を生みたまひ、次に聖神を生みたまふ。

又香用比賣命に過ひたまひて、大香山戸臣神を生み、次に御年神を生

みたまふ。御年神は穀神をまもり成したまふ神なり。

大年神また天知迦流美豆比賣命に過ひたまひて、奥津日子神奥津日女神二柱の神を生みたまふ、奥津日女神の亦の御名を大戸比賣神と申したてまつる。此二柱の神を合せて庭津日神と申したてまつる、諸人の持ち齊ぐ竈の神にまします。

次に大山咋神を生みたまふ、亦の御名を山末之大主神と申したてまつる、近江國の日吉山に坐ます、また葛野の松尾に坐ます、此神は用鳴鏑に成りたまへる神なり。次に阿須波神を生みたまひ、次に波比岐神を生みたまふ。次に香山戸神を生みたまひ、次に羽山戸神を生みたまひ、次に大土神を生みたまふ。大土神の亦の御名を土之御祖神と申したてまつる、土の神なり。

羽山戸神大宜津比賣神に過ひたまひて、若山咋神を生みたまひ、次に

若年神を生みたまひ、其妹神若沙那賣神を生みたまひ、次に彌豆麻岐神を生みたまひ、次に夏高津日神を生みたまひ、次に秋比女神を生みたまひ、次に久久年神を生みたまひ、次に久久紀若室葛根神を生みたまふ。

阿須波神波比岐神二柱の神は大宮地の靈として天皇の大宮地を守りたまふ神に坐ます、後の世に座摩の御巫の祭りたてまつる神なり。

祈年祭に此神にも幣帛たてまつりたまふ。

祈年祭祝詞

座摩の御巫の稱辭竟へたてまつる。

皇神等の前に白さく、生井榮井長津井、阿須波婆比支と御名は申して稱辭竟へたてまつらば、皇神等の敬きます下津磐根に宮柱太知立て、高天原に千木高知りて皇御孫命の瑞乃御舍を仕へたてまつりて、天乃御蔭日乃御蔭と隱りまして、四方國を安國と平らけく知しめす

がゆえに、皇御孫命の宇豆の幣帛を稱辭竟へたてまつらまくと宣る。

八束水臣津野命

素戔嗚尊の御子八島士奴美命の亦の御名を淸之繁名坂輕彥八島手神と申し、また淸之湯山三名狹漏彥八島野神とも申したてまつる。大山津見神の御女木花知流比賣命に遇ひたまひて御子布波能母遲久奴須奴神を生みたまひ、此神淤迦美神の御女日河比賣命に遇ひたまひて御子深淵之水夜禮花神を生みたまひ、此神天之都度閇知泥命に遇ひたまひて御子八束水臣津野命を生みたまふ。

臣津野命出雲國の狀を見たまへば小くまた狹し。乃ち廣く作り縫はんと思しめして、八雲立つ出雲國は狹き布の稚き國なるかな、初國小

く作りたまへり、吾此國を大きく作り堅めん、」とのたまひて、新羅國の三崎を見たまへば餘れるところありしかば、「吾國引せん、」とのたまひて、童女の胸の如く廣き鉏を取りて大魚を衝割き屠る如く其三崎を切取りて、三縒の太綱を打掛けて、靜かなる波の上を河船をゆら〳〵と引寄する如く國來々々と引寄せて縫つくりたまへる國は、去豆乃打絶より支豆支乃御崎なり。其綱を緊ぎし杙は石見國と出雲國との堺なる佐比賣山なり、持引きし綱は薦乃長濱なり。

次に北門佐岐國を國の餘りありやと見たまへば、餘れるところありしかば、「吾國引せん、」とのたまひて、童女の胸の如く廣き鉏を取りて、大魚を衝割き屠る如く其國を切取りて、三縒の太綱を打掛けて、靜かなる波の上を河船をゆら〳〵と引寄する如く國來々々と引寄せて縫作りたまへる國は多久之打絶より狹田國なり。

次に北門良波の國を國の餘りありやと見給へば餘れるところありしかば、「吾國引せん、」とのたまひて、童女の胸の如く廣き鉏を取りて、大魚を衝割き屠る如く其國を切取りて、三縒の太綱を打掛けて靜かなる波の上を河船をゆら〳〵と引寄する如く國來々々と引寄せて縫作りたまへる國は手縫乃打絶より闇見國なり。

次に高志國の都々乃三崎を見たまへば國の餘れるところありしかば、「吾國引せん、」とのたまひて、童女の胸の如く廣き鉏を取りて、大魚を衝割き屠る如く其國を切取りて、三縒の太綱を打掛けて靜かなる波の上を河船をゆら〳〵と引寄する如く國來々々と引寄せて縫作りたまへる國は三穂乃崎なり、持引きし綱は夜見島なり、綱を緊ぎし杙は伯耆國なる大神岳なり。

臣津野命布怒豆怒神の御女布帝耳命に遇ひたまひて御子天之冬衣

神を生みたまひ、此神刺國大神の御女刺國若比賣命に遇ひたまひて大國主命を生みたまふ、此神の亦の御名を大穴牟遲命と申し、また葦原色許男命と申し、また八千矛命と申し、また宇都志國魂命とも申したてまつる、すべて御名五つあり。此く多く御名を持ちたまへるは勝れて貴き大神に坐ますがゆえなり、出雲國に坐まして後に豐葦原之中國の主と成りたまひしによりて、大國主命と申したてまつる、また國土守護ます神なるがゆえに、大地主神とも申したてまつる。

御年神

大地主神出雲國に坐まして御田營りたまふ時に、田人に牛の肉を食はせたまへり。その時御年神の御子其田に至りて其狀を見たまひて、

「あな汚穢し、」とのたまひて、獻りし御饌に唾して、急ぎ歸りて其父神に見たまひしまゝに告げたてまつりたまへる御田に蝗を放ちたまへり。

此く蝗を放ちたまひしかば、御年神大く怒りたまひ、苗の葉忽ちに枯れ損ねて篠竹の如くなりたり。此によりて大地主神愁ひなげきたまひて、片巫と肱巫にト占はせたまへば、御年神の祟りたまふによりて此く苗の葉篠竹の如くなりて枯れ損ふなりと白す。乃ち御年神に白き猪白き馬白き雞をたてまつりて、其御怒を解きたてまつらん爲めに祈りたてまつるべき狀を請ひたまふ時に、御年神教へさとしたまはく、「此は實に吾心なり、然れば廡柄を以て拂を作りて苗を拂ぎまた麻葉を以て拂ひ天之押草を以て押したまふべし。此く拂ぎ拂ひ押したまひて烏扇を以て扇きたまはゞ蝗忽ちに去らん、若し尙去らずば、溝の口に牛の肉を置き男柱の形を

作りて其に添へまた慈子山椒呉桃葉と鹽を其田の畔に班置きたまふべし、と告げたまへり。

大地主神乃ち御年神の教へたまひしまゝに、遺るところなく行ひたまひしかば、苗の葉また茂りて年穀豊かに實れり。此によりて後の世までも白き猪白き馬白き雞をたてまつりて御年神を祭りたまふなり。

祈年祭祝詞

集侍れる神主祝部等もろ〳〵聞しめせと宣る。

高天原に神留ります皇睦神魯岐神魯美命もちて、天社國社と稱辭竟へたてまつる。

皇神たちの前に白さく、今年の二月に御年はじめたまはむとして、皇御孫命の宇豆乃幣帛を朝日の豊逆登りに稱辭竟へたてまつらく

と宣る。

御年皇神たちの前に白さく、皇神等の依さしたてまつらむ奥津御年を、手肱に水沫畦垂り、向股に泥土畦寄せて、取作らむ奥津御年を、八束穂の伊加志穂に皇神等の依さしたてまつらば、初穂をば千穎八百穎にたてまつり置きて、瑞の邊高知り瑞の腹満雙べて、汁にも穎にも稱辭竟へたてまつらむ。

大野原に生ふるものは甘菜辛菜、青海原に住むものは鰭乃廣物鰭乃狹物奥津藻菜邊津藻菜に至るまでに、御服は明妙照妙和妙荒妙に稱辭竟へたてまつらむ。

御年皇神の前に白き馬白き猪白き雞種々の品物を備へたてまつりて、皇御孫命の宇豆乃幣帛を稱辭竟へたてまつらくと宣る。

大國主命

大國主命の兄弟すべて八十神坐ませり、然れども皆大國主命に國を避けたてまつりたまへり。此く國を避けたてまつりたまひし理由は、因幡國に八上比賣いふ美人あり。八十神たち各々此八上比賣を得んと思しめす御心ありて共に因幡國に往きたまふ。其往きたまふ時に、大國主命を從者にして袋を負はせて往きたまへり。

此くて氣多埼に到りたまひし時に、裸なる兎伏せり。先に立ちて往きたまへる八十神共兎を見たまひて、汝「疾く此海鹽を浴み、風の吹くに當りて高山の尾上に伏せ、此く伏して風に當らば、汝が身もとの如くならん」と敎へたまへり。

兎乃ち八十神の敎へたまひしまゝに、海鹽を浴み、風の吹くに當りて高山の尾上に伏せしかば、其海鹽の乾くまゝに、其身の皮悉く風に吹きさかれたり。此によりて痛みに堪えず泣き伏せり。

後より來たまへる大國主命此兎を見たまひて、「何故に汝は此く泣伏せるぞ、」と問ひたまへば、兎答へて、「吾もとより此國に住みたり、然れども洪水に流されて隱岐島に漂ひつけり。然る後に隱岐島より此國に渡り渡らんと思へども、渡るべき術を知らず、愁ひゐたる時に、海の中に鰐多く浮べり。其時に吾海の鰐を欺きて、「汝が族如何ばかりあるぞ、」と問ひしかば、鰐答へて、「吾族は海に充滿てり、」といふ。吾また欺きて、「吾族は山野に充滿てり。吾と汝と族の多き少きを競べ見んと思へば、汝は其族の在りの悉々伴ひ來て、此島より氣多埼まで列び伏せ。吾その上を蹈みて走りつゝ讀渡らん、此く讀みて吾と汝と孰れか族の多きといふ

ことを知らん、」と云ひて欺きしかば、鰐ども欺かれて隱岐島より此國まで列び伏せし時に、吾其上を蹈み走りつゝ讀渡りて、今地に下りんとする時に、「吾まことは吾と汝と族の多き少きを競べんと欲せしにあらず、氣多埼に渡らんと欲して汝等を欺きて渡りたるなり、」と云ひしかば、端に伏せし鰐聞きて怒りて、吾を捕へて悉く吾衣服を剝ぎて裸の兎になしつ。此によりて愁ひ哭きゐたる時に、先に來たまへる八十神吾を見たまひて、「汝疾く海潮を浴みて、風の吹くに當りて高山の尾上に伏せ、」と敎へたまひしかば、其敎へたまひしまゝに伏しゐたるほどに、海鹽の乾くまゝに吾身の皮悉く風に吹きさかれて痛さに堪えず、此によりて此く哭くなり、」と白す。

大國主命聞きたまひて、「然らば汝今疾く此水門にゆき、水を以て汝が身を洗ひて、其水門の蒲黃を取りて敷き散らして、其上に輾轉べ、此くせ

は汝が身必ずもとの膚の如く成らん、」と敎へたまへり。兎其敎へたまひしまゝにせしかば、其身果してもとの如く成れり。

此兎大國主命にいはく、「八十神は必ず八上比賣を得たまはじ、袋を負ひたまへども、御神必ず此美女を得たまはん、」と告げたてまつれり。此兎は稻羽の素兎といふものなり、後の世に兎神といふ。

八上比賣果して此兎の告げたてまつりしごとく、八十神に答へて、「吾は汝たちの言は聞かじ、大穴牟遲神に遇はん、」とのたまへり。

此により八十神甚く怒りて大國主命を殺さんと共に議りて、伯耆國の手間山の山本に到りたまひて、大國主命を欺きて、「此山に赤猪多く住めり、吾等山に上りて其赤猪を追下らん、汝山の下に待居て其赤猪を待取れ。もし待取らずば、必ず汝を殺さん、」とのたまひしかば、大國主命欺かるゝとは知りたまはず、山の下に待居たまひて、八十神の猪の形に似

たる大石を火もて赤く燒きて轉し落したまふときに其石を待取らんとして、其石に燒着かれて死にたまへり。

此によりて大國主命の御母刺國若比賣命大く哭き患ひたまひて、高天原に馳上りて神產靈尊に請ひたてまつりたまひしかば、神產靈尊乃ち蚶貝比賣と蛤貝比賣を遣して、大國主命を作り活さしめたまふ。蚶貝比賣乃ち蚶貝の殼を燒焦し、蛤貝比賣水を以て母の乳汁に作りて、大國主命の御身に塗りしかば、忽ちに活きがへりたまひて麗しき壯夫に成りて出歩きたまへり。

然る後に八十神大國主命の活返りたまひて出歩きたまふを見て、また欺きて共に山に入り、大きなる樹を切倒して、矢を其樹に打立て、其樹の割けたる中に大國主命を入らしめて、其氷目矢を打放ちたまひしかば、大國主命其樹に挾まれてまた死にたまへり。御母刺國若比賣命また

た大國主命を尋ね求めたまひて、乃ち其木を拆きて取出して活したまひて、「汝此國に留らば、遂に八十神に滅されなん、」とのたまひて、大國主命を紀國の大屋毘古命の御許に急がしやりたまへり。

大國主命乃ち御母の敎へたまひしまゝに紀國に急ぎゆきたまふ時に、八十神また追來たまひて、矢刺したまふ。然れども大國主命木の俣より滑りのがれて去りたまへり。

大屋毘古命其とき大國主命の御爲に議りたまひて、「素戔嗚尊の坐ます根堅洲國に行きたまふべし、其大神必ず能く議りたまはん、」と敎へたまひしかば、大國主命乃ち其敎へたまひしまゝに、根之國の素戔嗚尊の御許に行きたまへり。

大國主命大屋毘古命の敎へたまひしまゝに、根之國に行きて素戔嗚尊の御許に到りたまへば、素戔嗚尊の御女須勢理比賣命出てゝ大國主

命に遇ひたまひて妻に成りたまひ、然る後に還り入りたまひて、甚麗し。き神今來たまへり、」と其父の大神に告げたてまつりたまふ。素戔嗚尊乃ち自ら出て、見たまひて、「此は葦原色許男と云ふ神なり、」とのたまひて、大國主命を喚入れて、蛇之室屋に寢しめたまへり。

其とき大國主命の妻須勢理比賣命蛇乃比禮を其夫大國主命に授けたてまつりたまひて、「其蛇もし喰はんとせば、此比禮を三度打振りて打撥ひたまふべし、其蛇おのづから靜らん」、と敎へたまふ。乃ち其敎へたまひしまゝに打ふり打撥ひたまひしかば、蛇おのづから靜りし故に平らけく寢て出でたまふ。然れども素戔嗚尊尙許したまはず、其次の夜は大國主命を呉公と蜂の室屋に入れたまふ。須勢理比賣命また呉公乃比禮蜂乃比禮を授けたてまつりたまひて、「此比禮を先の如く打振り打撥ひたまふべし」、と敎へたまふ。乃ち其敎へたまひしまゝに打振り

打撥ひたまひしかば呉公と蜂おのづから靜りしゆえに、また安らけく寢て出でたまへり。

然れども素戔嗚尊尙許したまはず、鳴鏑矢を大野の中に射入れて、大國主命に其矢を取らせたまふ。大國主命其野に立入りて其矢を探したまふ時に、素戔嗚尊火をつけて其野を燒廻らしたまふ。大國主命此く燒きめぐらされて、出づべきところを知らず愁ひたまふ時に、鼠來て、「内は富良々々外は須夫々々」、といふ。大國主命聞きて乃ち其ところを踏みたまひしかば、踏入りて落入りかくれたまふ。此く隱れたまへる間に火は燒過ぎたり。大國主命乃ち立出てたまへば、其鼠其鳴鏑矢を持出來て大國主命にたてまつれり。然れども其矢の羽は悉く其鼠の子どもに喫はれたり。

大國主命の妻須勢理比賣命大國主命は火に燒かれて死にたまへり

と思ひたまひて、喪具を持ちて哭きつゝ出でゝ求めたまふ。素戔嗚尊もまた大國主命をすでに死にたまへりと思しめして其野に立出でたまふ時に、大國主命鼠のたてまつりし其矢を持ちて野より立出でゝ、素戔嗚尊にたてまつりたまへば、素戔嗚尊大國主命を家に率ゐて入りたまひ、八田間之大室屋に喚入れて、御頭の虱を取らせたまふ。

大國主命其御頭を見たまへば、呉公多くゐたり。其とき御妻須勢理比賣命掠の木實と赤土とを大國主命に授けたまひしかば、大國主命其木實を咋破り赤土を口に含みて唾きだしたまふ。素戔嗚尊此を見て、大國主命まことに其呉公を咋破りて唾きだしたまふと思しめして、御心に愛しく思しめしつゝ寢たまへり。

素戔嗚尊此く眠りたまへる時に、大國主命ひそかに其大神素戔嗚尊の御髪を取りて其室屋の椽木毎に結ひつけて、五百引之大石を其室屋

の戸に取塞ぎて御妻須勢理比賣命を負ひて、素戔嗚尊の生大刀生弓矢、天之詔琴を取りもちて逃出てたまへり。其逃出てたまふ時に其天之詔琴樹に觸れて地動み鳴りひゞけり。

此く鳴りひびきしかば素戔嗚尊驚き起きたまはんとして、其室屋を引仆したまへり。然れども御髪悉く室屋の椽木に結著けたれば、動きたまふことを得ず、其御髪を解きたまふ間に大國主命遠く逃げたまへり。

素戔嗚尊大國主命を追ひて、根之國と此國との堺なる黄泉枚坂まで追到りたまひて、遙かに大國主命を望みて呼はりたまはく、其汝が持てる生大刀生弓矢を以て汝が庶兄弟どもを悉く坂の尾に追伏せ、河の瀨に追撥ひて、汝大國主の神となり、また宇都志國玉の神となりて、其汝が負へる吾女子須勢理比賣を嫡妻として、宇迦山の山本に底根石根に宮

柱太く、高津御宮に氷椽高く宮殿つくり立てゝ居れ、此奴、と告げたまへり。

大國主命根之國より歸りたまひし後に、素戔嗚尊の賜ひし生大刀生弓矢を以て、八十神を攻めたまへば、八十神防ぎたまふことを得ず、乃ち坂の尾毎に追伏せ河の瀬毎に追撥ひて、悉く青垣山の外に追出したまひて、然る後に國作りはじめたまへり。此くて遂に葦原の中國の主となりたまひしによりて、大國主命と申したてまつり、また天下所造大神と申したてまつる、此國土の御靈として國安らかに守護りたまふがゆえに宇都志國玉神とも申したてまつる。

八上比賣は遂に八十神の言を聞かず、大國主命に過ひたてまつれり。大國主命其後に八上比賣を率ゐて出雲國に來たまひしかども、八上比賣の御心やすからず、嫡妻須勢理比賣命を畏れたまひて、其生みたまへ

る御子を木の俣に刺狹み置きて返りたまへり。此御子を木俣神と申し、また御井神とも申したてまつる、井の神に坐ます、祈年祭に座摩の御巫の祭る神なり。

大國主神胸形の奥津宮に坐ます神多紀理比賣命に過ひたまひて、御子味鉏高彦根命を生みたまひ、次に高比賣命を生みたまふ。高比賣命の亦の御名を下照比賣命と申したてまつる。

味鉏高彦根命は後の世の鳴の大神なり。

大國主命また神屋楯比賣命に過ひたまひて、御子八重事代主命を生みたまひ、また八島牟遲神の御女鳥耳命に過ひたまひて、御子鳥鳴海尊を生みたまふ。

大國主命の御子すべて百八十一柱坐ませり。大國主命其中にて十五柱を珍子として殊に愛しみたまひ、共に天下を知しめしたまひしか

ば四方の國人皆其恩惠を受けて喜べり。

味鉏高彦根命

大國主命の御子味鉏高彦根命生れたまひて後に、八束髭胸前に至るまで御辭通はず、晝夜甚く哭きたまへり。乃ち高屋を作り高椅を建てゝ登り降りしつゝ發ひそだてたてまつれり。また御母多紀理比賣命此御子を船にのせて八十島を巡りつゝ宇良かしたまへども、御子尙物言ひたまはず、哭きたまふこと止まず。

此により父の大神甚く愁ひたまひて、御子の哭きたまふ由を白したまひて、夢に禊ぎたまふ時に、御子物言ひたまふと其夜の御夢に見たまひて、寤めて後に御子に問ひたまへば、御津とのたまふ。何處を御津と

云ふぞと更に問ひたまへば、御子乃ち御母の御前を立ち去り出でたまひて石川を渡りて坂の上に到り留りて「此處なり」と敎へたまへり。此く敎へたまひしかば、乃ち其津の水を汲みて御身沐浴したてまつれり。

後の世に出雲國造神吉事を奏したてまつらんとして、朝廷に上る時に、必ず此津の水を汲みて用ふ。此によりて姙める婦女は其村の稻を食はず、若し食へば生まるゝ子物言はず。

高志國沼河比賣

大國主命の亦の御名を八千矛神と申したてまつる。

八千矛神高志國の沼河比賣に遇はんと思しめして、高志國に行きて其童女の家に到りて歌ひたまはく、

「八千矛の神の命は
八島國妻求ぎかねて、
遠とほし高志の國に
賢し女を在りて聞かして、
美麗し女を在りと聞かして、
眞呼ばひに在り立たし、
よばひに在り通はせ、
大刀が緒もいまだ解かずて、
覆衣をもいまだ解かねば、
童女の鳴すや板戸を
押そぶらひ吾が立たせれば、
引こづらひ吾が立たせれば、

青山に鵼は鳴き、
狹野津鳥雉は動よむ、
庭つどり鷄は鳴く、
愁たくも鳴くなる鳥か、
この鳥もうち病めこせね、
いしたふや天馳使者
ことの語りごとも此をば、
大國主命此く歌ひたまへば、沼河比賣いまだ戸を開かず、戸の内より
歌ひたまはく、
「八千矛の神の命、
ぬえくさの女にあれば
吾がこゝろ浦渚の鳥ぞ

今こそは千鳥にあらめ、
後はなどりにあらむを、
生命はな死せたまひそ、
いしたふや天馳使者、
ことの語りごとも此をば」、
青山に日が隠らば、
ぬばたまの夜はいでなむ、
朝日の笑みさかえきて、
栲綱の白きたゝむき、
沫雪の弱やる胸を、
そたゞき叩きまなぐり、
真玉手たまてさし纏き、

股長にいはなさむを、
あやにな戀ひきこし、
八千矛の神の命、
ことの語りごとを此をば」、
此くて其夜は過はず、明る日の夜過ひたまへり。

須勢理比賣命

大國主命の沼河比賣に過ひたまふことを知りたまひて、其大后須勢理比賣命甚く妬妬みたまへり。此によりて大國主命わびたまひて、出雲國より倭國に上りたまはんとする時に、束裝して立ち上りつゝ、御片手は御馬の鞍にかけ、御片足は其御鐙に蹈入れて歌ひたまはく、

「ぬばたまの黒き御衣服を
まつぶさに取り裝ひ、
奥津鳥胸見るとき、
鰭たぎも此は適はず、
邊津波磯に脱き棄て、
鴨鳥の青き御衣服を
まつぶさに取りよそひ、
奥つどり胸みるとき、
はたゝぎも此もふさはず、
へつなみ磯にぬぎうて、
山縣に求ぎし
あたねづき染木が汁に染衣を

まつぶさに取りよそひ、
奥つどり胸見るとき、
はたゝぎも此し宜し、
いとこやの妹のみこと、
群鳥の吾が群れ去なば、
引けとりの吾が引けいなば
泣かじと汝は云ふとも、
山處の一本すゝき
うなかぶし汝が泣くさま
朝雨の狹霧に起たむぞ、
わかぐさの妻のみこと、
ことの語りごとも此をば」、

其とき大后須勢理比賣命大御酒杯を取りたまひて、立ちより指し上げて歌ひたまはく、

「八千矛の神のみことや、
吾が大國主こそは男に坐せば、
うちみる島の埼ざき、
かきみる磯の埼遣ちず、
若草のつま持たせらめ、
吾はよも女にしあれば、
汝除きて夫はなし、
汝をきてつまはなし、
文垣のふはやがしたに、
むしぶすまにこやが下に、

栲衾さやぐがしたに、
沫雪の白きたゞむき
そたゝき叩きまながり、
眞玉手たまてさし纏き、
股長に寢をしなせ、
豐御酒たてまつらせ、
八千矛の神のみこと、
ことの語りごとも此をは」、

此く歌ひて、乃ち妹妖互ひに大御酒杯をさし交して結びかためて契りかため、むつみたまひて、後の世までも永く出雲國に鎮りたまへり。

此歌はすべて神語と云ふ。

少彦名命

大國主命國作りたまひつゝ出雲國御穗の崎に到りたまひ、伊佐佐の小汀に坐まして御食したまはんとする時に、海の上に人の聲せしかば、怪きて見たまへども更に人の影見えず。須くありて甚小き神あり、天之羅摩船に乘り、鵝の皮を全剝に剝ぎて衣服にし、また鷦鷯の羽を衣服にきて、波の穗より海水のまに〳〵浮び來たまふ。

此神やがて浮びつきたまひしかば、大國主命乃ち其神を取りて掌に入れて見たまへば、其神跳りて大國主命の御顏に飛つき其御頰に齧みつきたまふ。大國主命此により甚神異しと思しめして、其名を問ひたまへとも答へたまはず、また御供の神たちに問ひたまへども皆知ら

ずと答へたてまつれり。

其とき蟾蜍いてゝ、「此神の御名は久延毘古に問ひたまはゞ必ず知りてあらん」と白せしかば、乃ち久延毘古を召して問ひたまふ。久延毘古答へて、「此神は神產靈神の御子少彦名命と申したてまつる神なり」と告げたてまつれり。大國主命乃ち高天原に坐ます神產靈神に白したまへば、神產靈神答へて、「此はまことに吾子なり、吾生める子すべて千五百柱ありたる中にて最惡く教に順はず吾手の俣より滑り墮ちし子あり、必ず其神ならん。汝葦原色許男命其神をめぐみ育てゝ共に兄弟となりて其國を作りかためたまふべし」と敎へたまへり。

少彦名命の御名を顯はしたてまつりし久延毘古は山田之曾富騰といふ者なり、足は歩かねども悉く天下のことを知る神なり。後の世に案山子と云ふものなり。

神産靈神の教へをさとしたまひしまゝに、大國主命と小彦名命と二柱の神共に兄弟となりたまひて、心を一つにして力を戮せて國巡りしつゝ國作かためたまふ時に、伊邪那岐大神の眞名弟子熊野加夫呂岐櫛御氣野命五百津鉏乃神鉏を取りて二柱の神に授けたまへり。此によりて大國主命少彦名命二柱の神この鉏を持ちて天下を遣るところなく行巡りて草薦苔を殖えたまひて、海月の如く浮たによへる國を作りかためて豐葦原の國につくり成したまひ、また稻種を持巡りて殖えたまひて、瑞穗の國につくり成したまへり。

熊野加夫呂岐櫛御氣野命は素盞嗚尊の御靈なり。

大國主命病み伏したまひし時に、少彦名命大國主命を活さんと欲して、大分の速見湯を下樋より持度り引きたまひて、沐浴させたまひしかば、暫時ありて大國主命活きたまひて、「眞暫時寢たるかな」、とのたまひて

踐健びにたけびたまへり。其踐たけびたまひし跡後の世まで湯の中の石の上にあり、伊豫國の溫泉にあり。此くて天下の靑人草を憫みて二柱の神共に議りたまひて、藥湯泉の術をはじめたまへり。

此二柱の神また天下の靑人草また畜產の爲に其疾病を治すべき法を定めたまひ、また鳥獸の災害昆虫の災害を攘はん爲に其禁厭の術を定めたまへり。此によりて後の世に至るまで天下の人民其惠を受け、此二柱の神の定めたまひし法を用ひて皆効驗あり。此によりて大國主命少彦名命を後の世に醫藥神と申したてまつる。

少彦名命はまた酒を造りはじめたまへり。後に常陸國大洗の磯に現れたまへる醫藥神は大名持少彦名命と御名を敎へたまへり。大國主命の亦の御名を大名持命と申したてまつる。

大國主命少彦名命二柱の神共に力を戮せて國作りかためたまひし

後に、大國主命尙他足ず思しめして、「吾等が作りし國いかで善く作り成せりと云はん、」と少彦名命にのたまへば、少彦名命答へて、「善く作りなせる處もあり、また未だ成さゞる處もあり、」とのたまへり。

此くて後に少彦名命は伯耆國に到りて粟島に粟を蒔きたまひて、其粟のよく實れる時に、其莖に上りて彈かれて常世國に渡りたまへり。其ところを後に粟島と云ふ。

此二柱の神の座ましゝ志都乃岩屋は石見國にあり。

御室山

少彦名命の常世國に渡り去りたまひし後に、大國主命甚く愁ひたまひて、「吾獨りして何でか能く此國を作り成さん、何れの神と共に今より

後は此國をつくり堅めん、」とのたまひて愁ひたまふ時に、忽ちに神異き光あり、海原を照せり。大國主命あやしみて見たまへば、白き裝束して浪の穂の上にあらはれて、天之瓊矛を持ちて近より來たまふ神あり。

此神浮びつきたまひて、「吾前をよく祭りたまはゞ、吾共に此國を作らん、もし然らずは此國成り難からん、」とのたまふ。大國主命聞きて、「此く悟し敎へたまふ大神は何れの神に坐ますぞ、」と問ひたまへば、其神答へて、「吾は汝が幸御魂奇御魂なり、」と敎へたまふ。「然ましまさば可畏し、敎へたまふまゝに仕へたてまつらん、然れども何處に鎭りたまはんと思しめしたまふぞ、」と大國主命また問ひたまへば、其神また答へて、「吾をば倭の青垣山乃東山の上に齊ぎまつれ、」と敎へたまへり。

乃ち其敎へたまひしまゝに、倭の青垣山乃東山の上に御室を作りて鎭らせたてまつりたまへり。此によりて其ところを御室山と云ふ、後

の世に大三輪之大物主神と申したてまつる。

大國主命乃ち其幸御魂奇御魂の神を祭りたまひて、共に力を戮せて、廣矛を御杖にして、天下の荒振惡き神ともを悉く撥ひ平らげて、此國をつくり堅めたまひて、能くつくり竟へたまひしによりて、御名を八千矛神と申したてまつる。

天之日矛命

大國主命天下を行巡りつゝ播磨國に坐ませし時に、新羅國より渡り來たまへる神天之日矛命播磨國の宇頭川の底に到りて、大國主命に御宿を求めたまふ。然れども大國主命惜みて許したまはんとせず。此によりて天之日矛命うらみて、「大神は此國の主に坐ませば、此く宿を乞

ひたてまつるなり。何故に惜みて借したまはぬ」とのたまひしかば大國主命遂に海の中を許したまふ。天之日矛命其とき劍を以て海水を攪廻らして、海の中に宿りたまへり。

大國主命此狀を見て天之日矛命の勝れて健く坐ますことを知りたまひしかば急ぎ播磨國をまもりたまへり。

此天之日矛命の新羅國より渡り來たまひし理由は、新羅國に一つの沼あり、阿具沼と云ふ。此沼のほとりに賤女一人晝寢したる時に、日の光かゞやきて虹の如く其寢たる童女の陰上を指せり。其國にまた賤夫あり、此童女の晝寢たる陰上を日の光かゞやきて虹の如く指せるを見て、其狀を異しと思ひて、常に其童女の行狀を伺へり。

此童女其晝寢たる時より姙みて、生むべき時になりて赤玉を生めり。其伺へる男其赤玉を乞ひ取りて、恒に其玉を裹みて腰につけたり。此

男山谷に田を營らんとして、田人どもの飲食を牛に負はせて、山谷の中に行く時に、新羅國の主の御子天之日矛命に逢へり。天之日矛命此男を見て、「何故に汝は飲食を牛に負はせて山谷に入らんとするぞ、必ず此牛を殺して食ふならん」とのたまひて、忽ちに其男を捕へて殺さんとしたまふ。其男答へて、「吾此牛を殺さんとするには非ず、唯田人の食物を送るにこそあれ」と白せしかども、天之日矛命尙許さんとしたまはず、其男乃ち其腰の赤玉を解きて天之日矛命に捧げしかば、天之日矛命其赤玉を取りて、其男を赦したまへり。

天之日矛命其玉を持來て床の邊に置きたまひしかば、其玉忽ちに美麗しき孃子に化れり。天之日矛命乃ち此孃子に遇ひて妻にして住みたまへり。

此孃子天之日矛命の妻になりて後に、常に種々の珍味を設け備へて、

其夫に進むれども、天之日矛命心奢りて、常に此孃子を罵りしかば、此孃子うらみて、「吾はもとより汝の妻になるべき者にあらず、然れば今此國を去りて、吾祖の國に行かんとす」といひて、天之日矛命の出てたる隙をうかゞひて竊かに船に乘りて、青海原の八重乃潮路遠く渡りて、先づ筑紫國に渡りつきて、岐伊の比賣島に住みしかども、「此島は尙遠からず、此島にあらば、男神必ず尋ねて來たまはん」と云ひて、更に其島より遷りて、攝津國に到りて留れり。此によりてもとの島の名を取りて、攝津國の島を比賣島といふ。肥前國に比賣許曾社あり、攝津國にも比賣許曾社あり。此く二つの社あるは、肥前國より攝津國に遷りたまひしが故に、二つの社あり。

難波の比賣許曾社に坐ます神は阿加流比賣命と申したてまつる、難波の渡に塞りたまふ神なり。

天之日矛命後に其妻の逝れしことを知りて、乃ち追渡りきて、難波に到らんとせしかども、其渡の神途を塞ぎて入れたまはず、此によりて天之日矛命更に還りて但馬國に到りて、乃ち其國に留りて、多遲摩の俣尾が女前津見に遇ひて多遲摩母呂須久を生みたまへり。

多遲摩母呂須久が子を多遲摩斐泥と云ひ、斐泥が子を多遲摩斐那良岐と云ひ、比那良岐が子を多遲摩毛理と云ひ、次に多遲摩比多詞と云ひ、次に清彦と云ふ。此清彦が當麻之咩斐に遇ひて生める子を酢鹿之諸男と云ひ、次に菅竈由良度美と云ふ。多遲摩比多詞が其姪由良度美に遇ひて生める子葛城之高額比賣命は息長帶比賣命の御祖なり、息長帶比賣命は後の世に神功皇后と申したてまつる。

伊豆志袁登賣神

天之日矛命の渡りきたまふ時に持渡りたまへる神寶を玉津寶と云ふ。其神寶は珠二貫、次に振浪比禮、切浪比禮、振風比禮、切風比禮、次に奥津鏡、邊津鏡幷せて八種なり。

此八種の神寶は但馬の出石の社の八前の大神なり、此大神の御女を伊豆志袁登賣神と申したてまつる。

多くの神たち此伊豆志袁登賣を得んとしたまへども、皆得たまはざる時に兄弟二柱の神あり、兄神を秋山乃下冰壯夫と云ひ、弟神を春山之霞壯夫と云へり。其兄神其弟神にのたまはく、「吾伊豆志袁登賣を得んと乞へども、許さず、汝此嬢子を得んや、」と問ひたまへば、弟神答へて、「吾易

く其嬢子を得ん、」とのたまふ。其兄神聞きて、「汝もし此嬢子を得たらば、吾上下の衣服を脱ぎ身の長を量りて甕に酒を造り、また山河の物を悉く設け備へて償はん、」と白したまふ。

此く白したまひしかば、其弟神乃ち其御母神に具に兄神の白したまひしまゝに告げたまふ。母神聞きて乃ち藤葛を取りて一夜の間に衣褌より襪沓まで悉く織縫ひ、また弓矢を作りたまひて、春山乃霞壯夫に其衣褌を服せ、其弓矢を取持たせて、其嬢子の家に遣したまふ。此く遣したまひしかば、其衣服も弓矢も悉く藤花に成れり。

春山乃霞壯夫其弓矢を嬢子の厠に繫けたまへり。

此く繫け置きて待ちたまへば、伊豆志袁登賣厠に入りて其花を異しと思ひて取りて持ち出でたまふ。春山乃霞壯夫乃ち其嬢子の後方に立ちて其屋に入りて、此嬢子に遇ひたまふ。此く遇ひたまひしかば、子

一人生みたまへり。此くて後に春山之霞壯夫其兄神に、「吾はすでに伊豆志袁登賣を得たり、」と告げたまへり。

然れども秋山乃下冰壯夫其弟神の伊豆志袁登賣を得たまへることを知りて心に妬く思ひて、其償はんと白したまひし物を償ひたまはず。此によりて弟神うらみて其御母に愁ひ白したまへば其御母聞きて怒りたまひて、「すべて吾世のこと神の道こそ習はめ、いかで顯見き青人草の道を習ひて、其償はんと云ひし物を償はんとはせざる、」とのたまひて、其兄神を怨みたまひて、乃ち其伊豆志河の河島の節竹を取りて、八目の荒籠をつくり、其河の河石を取りて鹽に合へて、其竹葉につゝみたまひて呪咀ひたまはく、「此竹の葉の青むが如く、また此竹の葉の萎むが如く青みしぼめ。また此鹽の盈乾るが如く盈乾よ。また此石の沈むが如く沈み伏せ、」とのたまひて呪咀ひたまひて、竈の上に置かしめたまへり。

此く詛かしめたまひしかば、其兄神八年の間干き萎み病みふしたまへり。此によりて兄神うれひ哭きて其御母に請ひたまふ時に、其母其呪咀を返さしめたまひしかば、兄神の御身またもとの如く成れり。

瑞穂國の巻

饒速日命

天照大御神高天原に坐まして、「豐葦原之千秋之長五百秋之瑞穂國は吾御子正哉吾勝勝速日天之忍穂耳命の知しめすべき國なり、」とのたまひて、天降したまはんとするときに、正哉吾勝勝速日天之忍穂耳命高皇産靈尊の御子常世乃思兼神の御妹萬幡豐秋津師姫栲幡千々姫命を御后として御子天照國照彦天之火明櫛玉饒速日命を生みたまふ。乃ち先づ此御子を天降したまはんと欲して、天照大御神に乞ひたまへば、天照大御神許したまひて、天照國照彦天之火明櫛玉饒速日命を天降したまへり。

饒速日命高天原より天降りたまふ時に、天照大御神天津璽乃瑞之御寶を饒速日命に授けたまへり。授けたまへる御寶は奥津鏡一つ、邊津鏡一つ、八握劍一つ、生玉一つ、死反玉一つ、足玉一つ、道反玉一つ、蛇乃比禮一つ、蜂乃比禮一つ、品物乃比禮一つ、幷せて十種の神寶を授けたまひて教へまたはく、「もし痛むところ有らば、此十種の神寶を振へ、ひと、ふた、み、よ、いつ、むゆ、なゝ、やゝこゝの、たりと云ひて、振へ、ゆらゝと振へ。此くせは死にたる者も生返りなん」と教へたまへり。

高皇產靈尊また饒速日命にさとしたまはく「もし豐葦原の中國に荒振惡き神あり、天神の御子を拒ぎて待ち戰ふ者あらば、能く謀計を用ひて欺きたばかり待ち拒ぎて平定け鎭めたまふべし」とのたまひて天之香語山命天之字受賣命天之太玉命天之兒屋根命天之櫛玉命天之道根命天之神玉命天之椹野命天之棘戸命天之明玉命天之牟良雲命天之神

立命天之御蔭命天之造日女命天之世手命天之斗麻彌命天之背男命天之玉櫛彥命天之湯津彥命天之神魂命天之三降命天之日神命天之乳速日命天之八坂彥命天之伊佐布魂命天之伊岐志邇保命天之活玉命天之少彥根命天之事湯彥命天表春命天之下春命天之月神命あはせて三十二柱の神を副へて防衛とし、物部の祖天津麻良笠縫部の祖天曾蘇、爲奈部の祖天津赤占、十市部の祖富富侶、筑紫の弦田物部の祖天津赤星合せて五部の者どもを從者とし、二田、大庭、舍人、勇蘇、坂戸、五部造を伴領として此五部造に天之物部を率ゐて從ひたてまつらせ、二田、當麻、芹田、鳥見、横田、鳥戸、浮田、巷宜、足田、酒人、田尻、赤間、久米、狹竹、大豆、肩野、羽束、尋津、布都留、住跡、讃岐三野、相槻、筑紫聞、播磨、筑紫贄田合せて二十五部の天之物部に悉く劒矛を持たせ、また跡部首の祖天津羽原を船長として梶取船子を率ゐて從ひたつまつらせ、此く諸の神たちまた從者どもを悉く從は

しめて、饒速日命を天降したまへり。

饒速日命乃ち天照大御神高皇産靈尊の敎へたまひしまゝに、天之磐椙船に乘りて、河内國の河上乃哮峯に天降りたまひ、更に大倭國の鳥見白庭山に遷りて留りたまひて、國神長髓彥の妹御炊屋姬を妻としたまへり。然れども御炊屋姬妊みて未だ子生むべき時に成らざる間に、饒速日命は既に死にたまへり。此く死にたまひしがゆゑに、また高天原に復上りたまはず。

饒速日命此く死にたまひて、高天原に還上りたまふことなかりしかは、高皇産靈尊御心に異しと思しめしたまひて、速飄神を召して、豐葦原の中國に遣せし吾御子饒速日命いまだ還り上りたまはず、汝今疾く降りて其久しく留りたまふ理由を尋ねて、復命白すべし、とのたまひて、速飄神を急ぎ降したまふ。速飄神乃ち高皇産靈尊の敎へたまひしまゝ

に、急ぎ天降りして見たまへば、饒速日命はすでに死にたまへり。乃ちまた急ぎかへり上りて、高皇産靈尊に饒速日命のすでに死にたまへることを白したてまつりたまへり。

高皇産靈尊聞きて哀れと思しめしたまひて、乃ちまた速飄神をつかはして、死にたまへる饒速日命を高天原に持上らしめたまひて、其御死骸を置きて、日は七日夜は七夜遊樂して哀泣きたまひて後に斂したてまつらせたまへり。

此饒速日命の御炊屋姬に遇ひて生みたまへる御子を可美眞手命と申したてまつる。後に神武天皇に從ひたまへり。

天稚彥

然る後に天照大御神高天原に坐まして、「豐葦原之千秋之五百秋之瑞穗國は吾御子正哉吾勝勝速日天之忍穗耳命の治しめすべき國なり、」とのたまひて、天降したてまつりたまふ時に、天之忍穗耳命天之浮橋に降立ちて、見下したまへば、豐葦原の中國甚く喧擾げり。

天之忍穗耳命見たまひて、豐葦原之千秋之五百秋之瑞穗國は今甚く喧擾げり、此によりて云へば其國未だ靜かならず、尙荒振神多し、あな凶目しこめき國なるかな、」とたまひて、乃ちまた高天原に返りのぼりて、具に其見たへる狀を告げたてまつりたまへり。

此により高皇產靈尊八百萬の神たちを高天原の天之安河の河原に召集へたまひて、天照大御神の詔のまゝに神たちに告げたまはく、「天照大御神此豐葦原之瑞穗國は御子天之忍穗耳命の治しめすべき國なりとのたまひて、天降したてまつりたまふ時に、天之忍穗耳命天之浮橋に

降立ちて見たまへば豐葦原之瑞穗國は尙甚く喧擾ぎて靜かならず千早振荒振國神邪惡神ども多く起りて、磐根樹根草の片葉まで物言ひて、夜は煙火の如く喧囂ぎ晝は狹蠅の如く沸立ちて、甚凶目しこめき國なりしかば、天之忍穗耳命また返りのぼりたまへり。先づ何れの神をつかはして、其荒振國神もろ〳〵の邪惡神どもを平定けて天神の御子を降したてまつらん、」と問ひたまへば、八百萬の神たち思兼神と共に議りたまひて、「天之穗日命は傑れたる神に坐ませば、此神をつかはしたまふべし、」と答へたまへり。

乃ち天之穗日命を遣したまへり。然れども天之穗日命葦原乃中國の主大國主命に媚び從ひて、三年に至るまで復奏したまはず。また天之穗日命の御子天之鳥船命を下したまひしかども、此神もまた其御父に順ひて返言白したまはず。

此によりて天照大御神の御心のまゝに高皇産靈尊更に八百萬の神たちを高天原の天之安河の河原に神集へ集へたまひ、神議り議りたまひて、「神たちの申したまひしまゝに天之穂日命を葦原乃中國に遣しまひしかども、三年に至るまで復奏したまはず。また何れの神を遣して荒振國神どもを征討けしづめん」と問ひたまへば常世乃思兼神また八百萬の神たち共に議りて、「天津國玉神の子天稚彦をつかはしたまふべし」と答へたまへり。

乃ち天稚彦に天之加久弓天之加久矢を持たせて天降したまへり。然れども天稚彦葦原國に降りつきて大國主命の御女下照比賣を得て妻として留りて、また大國主命に媚附きて、心に其國を得んと願ひて、八年に至るまで復命白さず。

高皇産靈尊また天照大御神の御さとしたまひしまゝに、高天原の天

之安河の河原に八百萬の神たちを神集へ集へたまひ、神議り議りたまひて、「神たちの白したまひしまゝに天稚彦を葦原の中國に遣はしたまひしかども、八年に至るまで復命申さず。今いづれの神を遣して天稚彦が久しく滞留る理由を問はしめん」と問ひたまへば、思兼神また八百萬の神たち共に議りて、「然らば名鳴雉を遣したまふべし」と答へ給ふ。高皇産靈神乃ち名鳴雉を召したまひて、「汝今疾く葦原中國に降りて天稚彦に問はん狀は、汝を葦原の中國に遣したまひしは、其國の荒振惡き神を平定しづめしめんが爲なり。何故に八年に至るまで復命申さざると問へ」と敕へて降したまへり。

然れども此雉飛降りて見れば粟田豆田ありしかば、此の田に留りて返らず。乃ち八百萬の神たちの申したまひしまゝに、名鳴雉をつかはして、天稚彦が久しくとゞまる理由を問はしめたまへり。

名鳴雌雉乃ち高皇產靈尊の敎へたまひしまゝに天降りして天稚彥が門に到りて見れば湯津楓の木あり。乃ち其木の上に止りて、天照大御神の詔したまひしまゝに、高皇產靈尊吾をつかはして問はしめたまふ。聞け汝天稚彥、天神の汝を此豐葦原の中國につかはしたまへるは、此國の千早振あらぶる國神を平定しづめしたまはんが爲めなり。何故に八年に至るまで復命申さゞる」、と問へり。

天稚彥が天降りする時に、天稚彥につきて天之磐椅船に乘りて降れる天之探女といふ者あり、名鳴雌雉が此く云ひしを聞きて、「此鳥は惡しき聲して鳴く鳥なり、疾く射殺したまふべし」、と天稚彥に云ひしかば、天稚彥乃ち天之探女が云ひすゝめしまゝに天神の賜ひし天之加久弓天之加久矢を以て其雉を射殺せり。

然るに其矢雉の胸を貫き通りて、高く射上げられて、高天原に飛びつ

きて、高皇產靈神の坐ます御前に落ちたり。高皇產靈神怪みて其矢を取りて見たまへば其矢の羽に血着きたり。乃ち諸の神たちに見せたまひて、「此矢は天稚彥が天降りする時に賜ひし矢なり、如何にして此には飛びきしならん。其矢の羽の血染れたるは國神と戰ひし血のつきたるにや」、とのたまひて、「若し天稚彥天神の詔命をたがへず荒振神を射たる矢の飛び來たりしならば、天稚彥に中らざれ。若し邪惡き心あらば天稚彥此矢に中りて死ぬ」、と呪ひたまひて、其矢を取りて其飛び來たりしもとの穴より衝き返したまひしかば、其矢遠く葦原の中國に飛びつきて、天稚彥が新嘗して胡床に寢たる高胸坂に中れり。天稚彥此矢に貫かれしかば、忽ちに死にたり。

喪山

天稚彦高皇産靈尊の衝き返したまへる矢に貫かれて死にたる時、其妻下照比賣の哭聲風のまに〳〵響きて、高天原に達せり。高天原なる天稚彦が父天津國玉神また其妻子ども、其哭聲を聞きて、天稚彦が死にたりと云ふことを知りしかば、乃ち疾風神をつかはして天稚彦が死骸を高天原に持上らしめて喪屋を造りて其中にかくし、然して後に、河雁を技佐理持とし、鷺を箒持とし、雀を碓女とし、鳥鴉を哭女とし、鵠を尸者とし、鵄を綿造とし、翠鳥を御食人とし、烏を宍者とし、すべて衆鳥をして事を行はしめ、此く行ひさだめて、日は八日夜は七夜哭き遊べり。

大國主命の御子味鉏高彦根命天稚彦が死にたりと云ふことを聞き

て、高天原に上りきて天稚彦が喪を吊ひたまふ時に、天稚彦が父母妻子ども、此神を見て、「吾子は尚死なずありけり、吾君は尚死なず坐ましけり」、と云ひて、味鉏高彦根命の御手にかゝりつき、御足に纏きつきて、喜び哭けり。味鉏高彦根命の御容姿天稚彦に甚よく似てありしによりて、此く過てるなり。此によりて味鉏高彦根命甚く怒りたまひて、「吾は愛しき友の死にたるを吊はんと思ひて遠く上り來たるにこそあれ、何故に吾を穢き死人に比るぞ」、とのたまひて、佩きたまへる十拳劍を拔き放ち、其喪屋を切り伏せ、足を以て蹴はなちたまへり。

其切りたまへる御劍の名を大葉刈と云ひ、また神度劍とも云ふ。其切りふせ、蹴はなちたまへる喪屋は高天原より墮ちて山と成れり。美濃國の藍見河の河上なる喪山は其山なり。

味鉏高彦根命の御容姿すぐれて美麗しく丘二丘谷二谷の間に照り

わたれり。其怒りて飛去りたまふ時に、其御妹下照比賣命其御名を顯さんと欲して歌ひたまはく、

「天なるや弟棚機の
うながせる玉の御統みすまるに、
穴玉はや眞谷二わたらす
味鉏高彦根神ぞや」、

此く歌ひて其御名を顯したまへり。

健御雷命

天稚彦死にたる後に高皇産靈尊また高天原の天之安河の河原に八

百萬の神たちを神集へ集へたまひ神議り議りたまひて、「神たちの中したまひしまゝに名鳴雄雉を遣せしかど歸らず、また名鳴雌雉をつかはして天稚彦が久しく葦原の中國に淹るゆえを問はしめしかば、天稚彦に射殺されてまた歸らず、其雉を射たる矢の飛びきしを取りてもとの穴より衝返せしかば、其矢飛びゆきて天稚彦が胡床に寢たる高胸坂どに中りて貫かれて死にたり。今また何れの神をつかはして、荒振國神もを平定しづめしめて天神の御子を下したてまつらん」、と問ひたまへば、八百萬の神たちまた思兼神と議りたまひて、「然らば天之安河の河上の天之石窟に坐ます稜威之尾羽張神をつかはしたまふべし、若し此神ならずは此神の御子甕速日神の御子健御雷神をつかはしたまふべし。然れども其稜威之尾羽張神は天之安河の水を逆まに塞上げて道を塞ぎてゐたまへば、他の神は行きて問ひたまふことを

得じ。必ず別に天之迦久神をつかはして其稜威之尾羽張神に問はしめたまふべし」と申したまふ。

乃ち天之迦久神をつかはして問はしめたまひしかば、稜威之尾羽張神答へて、「然申したまはゞ、可畏し、仕へたてまつらん、然れども此道には吾子健御雷命をつかはしたまふべし」、とのたまひて、乃ち健御雷命をたてまつりたまへり。

高皇産靈尊また「然れども何れの神を健御雷命と共につかはさん、また何れの神を副へてつかはさん」、と問ひたまへば、八百萬の神たち答へて、「磐裂根裂神の御子磐筒之男磐筒之女神の御子經津主神をつかはしたまふべし、また天之穂日命の子天之鳥船命を此の二柱の神を副へてつかはしたまふべし」、と申したまへり。

乃ち八百萬の神たちの白したまひしまゝに、天之鳥船命を經津主命

健御雷命二柱の神に副へて葦原の中國につかはしたまふ時に、天に荒振惡き星神あり、天津甕星と云ひ、亦の名を天之香香背男と云ふ。二柱の神まづ此神を誅けしづめて、然る後に葦原の中國に降りたまへり。

二柱の神天降りして、出雲國の伊佐佐の小濱に到りたまひて、十拳劍を浪の穂に逆まに刺したてゝ、其劍の前に趺坐みて大國主命に問ひたまはく、「天照大御神高天原に坐まして、此豐葦原の千秋の長五百秋の瑞穂國は吾御子正哉吾勝勝速日天之忍穂耳命の治しめすべき國なりとのたまひて、天降したまんとして、先づ吾等二柱の神を降しつかはして、此國を平定しづめしめたまふ。汝が治しめす此葦原の中國を天神の御子にさゝげたまはんや」、と問ひたまへば、大國主命答へて、「吾は云ふべきことを知らず、先づ吾子事代主命に問ひたまふべし。然れども事代主命は三穂埼にゆきて鳥の遊び魚釣して未だ歸りこず」、とのたまへり。

健御雷神乃ち熊野乃諸手船に稲背脚と云ふ者を載せて、使者として天之鳥船命をつかはして八重事代主命を召しきて、天照大御神の申したまひしことを告げたまひて、「大國主命は答へたまはず、吾子事代主命に問ふべしとのたまへり、今汝が御心如何に」、と問ひたまへば、事代主命聞きて、「天照大御神此くのたまはゞ可畏し、吾父の大神避けたまひて、天神の敎へたまへるまゝに此國は天神の御子にたてまつりたまふべし、と大國主命に告げたつまつりたまひて、「吾もまた天照大御神の御言に違はじ」、とのたまひて、乃ち海の中に八重の靑柴垣を造りて、御船を蹈みかたむけて、其中に隱れたまへり。

健御名方命

八重事代主命此く避けたてまつりて隱れたまひし後に、健御雷命また大國主命に問ひたまはく、「汝が子事代主命は今此く申して避けたてまつりて、隱れたまへり。また白したまふべき子ありや」、とのたまへば、大國主命答へて、「また吾子健御名方命あり、此子を除きては他になし」、とのたまへり。

大國主命此く答へたまふ時に、其御子健御名方命千引の大石を手末に持捧げ來て健御雷命の前に立ちたまひて、「吾父の大神の治しめす此葦原の中國に來て此く忍び忍び物言ふは誰の神ぞ、先づ吾と力競べせん」、とのたまひしが、健御雷命聞きて、「よし、力競べん」、とのたまひて、健御名方命に其御手を取らせたまふ。

健御名方命乃ち健御雷命のさし出したまへる御手を取りたまへば、其御手忽ちに立氷に化り、また忽ちに劍の刃に化る。

健御名方命おそれて退きゐたまふ。

然る後に健御雷命すゝみて健御名方命の御手を取りたまへば、其御手忽ちに若葦の如くに握拉がれつ。此く握拉ぎて投放ちたまへば、健御名方命逃げ走りたまふ。

健御雷命追ひゆきて信濃國の諏訪湖に追ひせめて、健御名方命を殺さんとしたまふ時に、健御名方命恐れて、「吾を殺したまふこと勿れ、吾は此地より他へは行かじ、また吾父大國主命の御心にも違はじ、兄神八重事代主命の御言にも背かじ、此葦原の中國は天照大御神のさとしたまへるまゝに天神の御子にたてまつらん」、と申したまへり。

此く申したまひしかば、乃ち許したまへり。

杵築之宮

健御雷命信濃國より出雲國に還りたまひて、大國主命に告げたまはく、「汝が子事代主命健御名方命二柱の神は天神の命のまに〳〵此國をたてまつらんと申したまへり、汝が御心今いかに」、と問ひたまひしかば大國主命答へて、「吾子二柱の神すでに此く白せば、吾もまた違はじ、此豐葦原の中國は天神の命のまゝにさゝげたてまつらん。唯吾住まんところを天神の御子の天日嗣と彌嗣々に知しめす天之御殿の如く、底津石根に宮柱太く打立て高津御空に棟木高く衝きたてゝ、吾前を祭らしめたまはゞ、吾は遠く此國を去りて幽れたる神の國に永く隱れてあらん、また吾子百八十柱の神々は事代主命悉く率ゐて仕へたてまつらば、

此國の中に遊ふ神はあらじ」とのたまひて、避けたてまつりたまへり。

大國主命此く國を避けたてまつりたまふ時に、「もし吾天神に背きて防きたてまつらば、此國の神皆共に防きたてまつらん、然れども吾今天神の命のまゝに避けたてまつれば、また背きたてまつる神あらじ」とのたまひて、此國を平げたまへる時杖につきたまひし廣矛を健御雷命に授けたまひて、「吾此矛を以て此國を治めて功績あり、今此矛を天神の御矛にたてまつらん、天神の御子此矛を以て國を治めたまはゞ、必ず國やすからん、吾治めし顯明のことは此より後天神の御子治めたまふべし、吾は退きて幽冥のことを治めん」と敎へたまひて、乃ち岐神を二柱の神に薦めて、「此神吾に代りて仕へたてまつりたまふべし」とのたまひ訖りて、隱れたまへり。

乃ち大國主命の乞ひたまひしまゝに出雲國の多藝志の小濱に大宮

地定めたまひて、諸神たち共ところに集ひて大神の宮を築きたまひ、また百八十柱の神たち御厨を立て、酒を醸して遊びたまへり。

大國主神は遂に此杵築宮に長く鎭りたまへり。大國主命のしづまりたまふ時に、高皇產靈尊天之穗日命に敎へたまはく、「汝天之穗日命は天神の御子の手長之大御世を堅磐常磐に齊ひたてまつりて、幸へたてまつれ」とのたまひしによりて、出雲國の國造は繼々に杵築宮に仕へたてまつりて、後の世に至るまで天皇の御世を齊ひたてまつり、御禊之神寶をたてまつりて神賀吉詞を白すなり。

大國主命かく杵築宮に鎭りたまひしかば、水戸神の孫櫛八玉神を膳夫として大神に天之御饗たてまつりたまふ時に、櫛八玉神鵜に化りて海の底に沈み入りて底の埴土を咋出て、天之八十平瓮を作り、海布の柄を鎌りて火切臼に作り、海蓴の柄を取りて火切杵につくり、此二つの

物を以て火を燧出してのたまはく、「此吾燧れる火は高津御空には神産靈御祖命の高天原の新巣の凝煙の八拳垂るまで燒上げ、地の下には底津石根に燒凝して、栲縄の千尋縄打延へて釣する海人が大口の尾翼鰭さわ〳〵に控寄揚げて、析竹のたわ〳〵に天之真魚咋たてまつらん、」と禱白したまへり。

天之穂日命

天之穂命の大國主命を祭りたまふゆえは、大國主命の葦原の中國を避けたてまつりたまへる時に、高皇産靈尊大國主命の請ひたまふことを聞きたまひて、經津主命健御雷命二柱の神をつかはして、大國主命に告けしめたまはく、「汝の請ひたまふこと誠に深き理由あり、汝の治めた

まへる現世のことは此より後天神の御子治しめしたまふべし、汝は神事を治しめすべし。また汝の住みたまふべき高天原の天之日隅宮は今造らしめん、其造らん狀は、乃ち縱横の御量を以て量りて、千尋の栲縄を以て百結びに結びつけ、八十結びに結び下げて、柱は太く、板は廣く、また厚くせん。また汝の爲に御田造らせん。また汝の海に遊び往來ひたまはんために、高橋を作立て、天之鳥船を作浮べん。また天之安河にも打橋をつくり渡さん、また百八十縫の白栖をつくりてたてまつらん。汝の祭祀を爲さん者は天之穂日命なり、」と敎へたまへり。此く敎へたまひしによりて、天之穂日命の御末は出雲國の國造になりて、杵築の社に仕へたてまつる。

出雲國造神賀詞

八十日日は在れども、今日の生日の足日に、出雲國の國造かしこみ

かしこみも申したまはく、

挂まくも畏き明御神と大八島國知しめす天皇命の大御世を手長の大御世と齊として、出雲國の青垣山の内に下津石根に宮柱太敷き立て、高天原に千木高知ります伊邪那岐の日眞名子加夫呂伎熊野大神櫛御氣野命國作坐し、大穴持命二柱神を始めて、百八十六社に坐す皇神たちを某甲が弱肩に太襷取掛けて、伊都幣帛の緒むすび、天之御陰かぶりて、伊都の眞屋に礒草に伊都の席と刈敷きて、伊都瓶黒盆し、天之瑞和に齊こもりて、しづ宮にしづめ仕へたてまつりて、朝日の豐榮登りに齊ひの返事の神賀の吉詞奏したまはくと奏す。

高天原の神王高御魂神魂命の皇御孫命に天下大八島國を事避奉りし時、出雲臣等が遠祖天之穂日命を國體見につかはしゝ時に、天之八重雲を押別けて天翔り國翔りて、天下を見廻りて返事申したまはく、豐葦原乃水穂國は、豈は五月蠅なす水沸き、夜は火瓮なす光く神あり、石根樹根立青水沫も事問ひて荒振國なり、然も鎮平けて皇御孫命に安國と平らけく知しめさしめむと申して、己命の兒天之夷鳥命に布都怒志命を副へて天降しつかはして、荒振神たちを撥平け、國作らしゝ大神をも媚鎮めて、大八島國の現事顯事を事避けしめき。

乃ち大穴持命の申したまはく、皇御孫命の靜りまさむ大倭國と申して、己命の和魂を八咫鏡に取りつけて、倭乃大物主櫛瓫玉命と名を稱へて大御和の神奈備に坐せ、己命の御子阿遲須岐高孫根命の御魂を葛木の鴨の神奈備に坐せ、事代主命の御魂を宇奈提に坐せ、賀夜奈流美命の御魂を飛鳥の神奈備に坐せて、皇御孫命の近き守神とたてまつり置きて、八百丹杵築の宮にしづまりましき。

是に親神魯岐神魯美命宣りたまはく、汝天之穂日命は天皇命の手

長の大御世を堅磐常磐にいはひたてまつり、伊賀志の御世にさきはへたてまつれと仰せたまひし次のまゝに供齊仕へたてまつりて、朝日の豐榮登りに神乃禮自利臣乃禮自利と御禊の神寶たてまつらくと奏す。

白玉乃大御白髮坐し赤玉乃御阿加良毘坐し、青玉乃水江玉の行あひに明御神と大八島國知しめす天皇命の手長の大御世を御横刀廣にうちかため、白さ御馬の前足爪後足爪蹈みたつることは大宮の内外の御門の柱を上津石根に蹈みかため、下津石根に蹈み凝りし、振りたつることは耳の彌高に天下を知しめさんことのしため、白鵠の生御調の玩物と倭文の大御心もたしに、彼方の古川岸此方の古川岸に生ひ立てる若水沼間の彌若えに御若えまし、須々伎振るをとみの水の彌をちに御をちまし、麻蘇比の大鏡の面を押しはるして見そなはすことの如く、明御神と大八島國を天地日月と共に安らけく平らけく知しめさむことのしためと御禊神寶をさゝげもちて、神乃禮自利臣乃禮自利と恐みかしこみも天津次の神賀の吉詞白したまはくと奏す。

大物主神

大國主命其治しめしたまへる豐葦原の中國を天照大御神のさとしたまひしまゝに天神の御子の御爲に避けたてまつりたまひて後に、御子事代主命と共に八百萬の神たちを天之高市に集へたまひて、此神たちを率ゐて高天原に昇りたまひ、御心の清く明く坐ますことを天照大御神に示したまひて、此より後は天神の御子の御爲に常に誠忠をつく

したまふべきことを申したふ時に、高皇産靈尊さとしたまはく、「汝もし國神を以て妻としたまはゞ、吾尚汝を疑ひて疏き御心坐まさんと思はん。此によりて今吾女三穗津比賣を下さん、此神を妻として共に住みたまひて、八百萬の神たちを率ゐて永く天神の御子の守護となりてまもりたてまつりたまふべし、」とのたまひて、大國主命をまた降したまへり。

大國主命は遂に大倭國に鎮りたまひ、御子味鉏高彦根命事代主命賀夜奈流美命もまた皆大倭國にしづまりたまひて、後の世に天皇の近き御守護神となりたまへり。其大倭國にしづまりたまへる大國主命の御魂は大三輪に鎮りたまふによりて、大三輪の大物主命と申したてまつる。

大國主神此くしづまりたまひしかば、乃ち手置帆負命を筮作者と定

め、彦狹知命を楯縫者と定め天之目一箇命を金匠者と定め、天之日鷲命を由布作者と定め、櫛明玉命を玉作者と定めて、天之太玉命に仰せて太手纛を肩に取りかけて大物主命を祭らしめたまへり。天之兒屋根命はもとより神事を知りたまふ神なるによりて、太兆の卜事を以て仕へたてまつりたまへり。此時經津主命齊の大人と成りて大物主命を齊ひたまひしによりて齊主神と申したてる。

大國主命かく大物主神と成りたまひて、「天照大御神は高天原を治しめしたまふべし、天神の御子は彌繼々に豐葦原乃中國を治しめしたまふべし、吾は大地の主として天神の御子の治しめさん此國土を守りて仕へたてまつらん、」と申したまひて鎮りたまへり。此によりて此大神の亦の御名を大地主神と申したてまつる。

此くて後に經津主命健御雷命二柱の神岐神を鄉導として天下を廻

りつゝ荒振神を悉く振ひ歸順神を和けしづめて、高天原に還り上りたまひて、葦原の中國悉く平けく安けく成りぬる狀を天照大御神に告げたてまつりたまへり。

後に經津主命は常陸國の香取にしづまりたまひ健御雷命は常陸國の鹿島にしづまりたまへり。合せて鹿島香取の大神と申したてまつるは此二柱の神に坐します。

春日

常陸國の鹿島に鎮りたまへる健御雷命香取にしづまりたまへる經津主命二柱の神は後に中臣の祖天之兒屋根命また高皇產靈尊の御子萬幡豐秋津姬命と共に大和國の春日の三笠の山に移りしづまりたま

ひて、天津日嗣のいやつぎ〳〵に天下治しめす皇御孫命の近き御守護神となりたまへり。

後の世の春日の祭に此四柱の神を祭りたまふ。

經津主命はまた齊主神と申したてまつる。健御雷命と共に天降りして、葦原の中國を普く巡行りたまひ、山河の荒振者どもを悉く平定けしづめたまひて後に、高天原に還らんと思しめして、御身にそへ持ちたまへる杖甲戈楯劍また執りもちたまへる玉を悉く常陸國に留めおきて白雲に乘りて天に上りたまへり。

春日祭祝詞

天皇が大命に坐す。

恐き鹿島に坐す健御賀豆智命、香取に坐す伊波比主命、枚岡に坐す天之兒屋根命、比賣神四柱の皇神たちの廣前に白さく、

大神等の乞はしたまひしまゝに春日の三笠山の下津石根に宮柱廣知立て高天原に千木高知りて、天乃御蔭日乃御蔭と定めたてまつりて貢る神寶は、御鏡御横刀御弓御梓御馬に備へたてまつり、御服は明妙照妙和妙荒妙に仕へたてまつりて、四方國のたてまつれる御調の荷前取竝べて青海原のものは、波多乃廣物波多乃狹物奥津藻菜邊津藻菜、山野のものは甘菜辛菜に至るまで、御酒は甕の邊高知り甕の腹滿竝べて、雜雜の物を横山の如く積置きてたてまつる宇豆乃大幣帛を安帛幣の足幣帛と平らけく安らけく聞しめせと皇大御神等を稱辭竟へたてまつらくと白す。

此く仕へたてまつるによりて今も去前も天皇が朝庭を平らけく、安らけく足御世の茂御世と齊ひたてまつり、常磐に堅磐にさきはへたてまつり、預りて仕へたてまつる處々家々王たち卿たちをも平らけく、天皇が朝庭に伊賀志夜久波叡の如く仕へたてまつり、榮えしめたまへと稱辭竟へたてまつらくと申す。

高千穗の巻

天津日高彦火邇々藝命

經津主命健御雷命二柱の神天降りして豐葦原の中國を平定けしづめたまひ、大國主命其治しめしたまへる國を天照大御神のさとしたまひしまゝに天神の御子にたてまつりて、其御子事代主命味鉏高彦根命と共に大倭國にしづまりたまひて後に、經津主命健御雷命二柱の神また高天原にかへり上りて、豐葦原の中國の荒振神どもを悉く攘ひしづめ、歸順ふ神どもを悉く和けしづめたまひぬる狀を天照大御神に告げたてまつりたまひしかば、天照大御神乃ちまた御子正哉吾勝勝速日天之忍穗耳命に敎へたまく、「今葦原の中國すでに平定け覺へたりと申す、

汝疾く天降りして治しめしたまふべし」とのたまひて天降したまはんとする時に、天之忍穗耳命申したまはく、「吾は天降りせんとして裝束してありし程に、子生めり、名は天邇岐志國邇岐志天津日高彦火邇々藝命と云ふ、此子を吾に代へて天降したまふべし」と乞ひたまふ。天照大御神聞きて、乞ひたまひしまゝにしたまへり。

天津日高彦火邇日藝命は御父天之忍穗耳命の高皇產靈尊の御女萬幡豐秋津比賣命に遇ひて生みたまへる御子なり。天照大御神高皇產靈尊わけて此御子を鍾愛み育てたまひて、日嗣の御子に定めたまへり。此によりて邇々藝命を皇御孫命と申したてまつり、其御つぎ〳〵の日嗣の御子をもまた皇御孫命と申したてまつる、凡て天神の御子に坐ます。

天照大御神乃ち太子天津日高彦火邇々藝命を天津高御座に坐せた

てまつりて、「此豐葦原の千秋の長五百秋の水穂國は汝の知しめしたまふべき國なり、然れば教へさとしたまふ命のまゝに天降りしたまふべし、」とのたまひて、天之兒屋根命天之太玉命天之宇受賣命石凝姥命玉祖命あはせて五伴緒を副へ、また天之忍日命また諸部緒の神たちを副へたまひ、また八咫の鏡天之雲劍二種の神寶を賜ひて永く天日嗣の御璽となさしめたまひ、また八坂瓊之勾玉と平國之廣矛を副へたまひ、更に常世思兼神手力男神天之石門別神を副へたまひて降したまふ。

此く天津日高彦火邇々藝命に諸の神たちを副へて天降したまはんとする時に、天照大御神みづから御手に其神寶鏡劍をさゝげ持ちたまひて言壽ぎたまはく、「大八島豐葦原の水穂國は吾御子の繼々王として治しめしたまふべき國なり。皇吾珍御子皇御孫命其國に天降りしたまはゞ、此天津高御座に坐まして、平國と平らけく治しめして、天津日嗣

の瑞穂を天津御膳の長御膳の遠御膳と萬千秋の長五百秋に安らけく齊庭に聞しめしたまふべし、わが高天原に知しめす齊庭の穂もまた吾御子に任せたてまつらん。また此鏡は專ら吾御魂として吾御前を拜くが如くいつきまつりて、殿を同じくし床を一つにして齊きたてまつりたまふべし。天津日嗣の隆へまさんこと永久に天壌と共に際涯なく窮極なかるべし」とのたまひて、次に天之兒屋根命天之太玉命に告げたまはく、「汝二柱の神もまた同じ殿の内に侍ひて皇御孫命の御前のことを取持ちて仕へたてまつりたまふべし、」と教へたまへり。

高皇產靈尊またのたまはく、「吾は高天原に天津磐境を造り天津神籬を起し樹てゝ皇御孫命の御爲に齊ひたてまつらん。汝天之兒屋根命天之太玉命二柱の神は天津神籬を持ちて葦原の中國に降りて、また皇御孫命の御爲に齊ひたてまつりたまふべし、」と教へたまひ更に天之太

玉命に敎へたまはく、「汝天之太玉命は諸部神を率ゐて高天原の儀の如くに仕へたてまつり、各々其職をまもりて仕へたてまつらしめたまふべし、」とのたまひて、諸の神たちを副へ從はしめて降したまへり。

「天之兒屋根命は中臣連の祖、天之太玉命は忌部首の祖、天之宇受賣命は猨女君の祖、石凝姥命は鏡作連の祖、玉祖命は玉祖連の祖なり。

天之石門別神は御門の神なり。

手力男命は伊勢の狹長田に坐ます。

猨田彦命

天津日高彦火瓊々藝命天降りしたまはんとする時に、先驅に立ちたまふ神立返りきて、「高天原の天之八衢に神ます、鼻の長さ七咫あり、

背の長さ七尺あまりあり、上は天原を光し、下は葦原の中國を光し、眼は八咫鏡の如くかゞやけり、」と告げたてまつりたまひしかば、乃ち御從者の神をつかはして問はしめたまへども、皆おそれて問ひたまはず。

天照大御神乃ち高皇産靈尊に天之宇受賣命を召さしめたまひて、「汝天之宇受賣命は手弱女なれども強き畏れね面勝神なり。然れば汝今往きて其神に問へ、吾御子の天降りしたまはんとする道に此く塞り居るは誰ぞと問へ、」とのたまはせたまふ。

天之宇受賣命乃ち敎へたまひしまゝに、進みゆきて其塞りゐたまふ神に向ひて、「天神の御子の今天降りしたまはんとする途に此く塞りゐたまふは、誰の神に坐ますぞ、」と畏れず問ひしかば、其神答へて、「吾は國神なり、吾名は猨田彦大神と云ふ。吾こゝに塞りゐるゆゑは、天神の御子今天降りしたまふと聞きしかば、迎へたてまつらんと思ひて此く待ち

ゐるなり、」と申したまふ。天之宇受賣命聞きて、「然らばさきに立ちて行きたまはんや、また吾先に立ちて行かんか、」とまた問ひたまへば、猨田彦神答へて、「吾先に立ちて皇御孫命の天降りしたまふ御先拂ひせん、」と申したまふ。天之宇受賣命また、「汝は何處に到りたまふぞ、また皇御孫命は何處に到りますべきぞ、」と問ひたまへば、猨田彦大神答へて、「天神の御子は筑紫の日向の高千穗乃槵觸峯に到りたまふべし、吾は伊勢の狹長田五十鈴の河上に到らん。吾を見顯したまひしは汝なれば、また後に吾を送りたまふべし、」と申したまへり。

天之宇受賣命乃ち還りて、猨田彦大神の申したまひしまゝに、天照大御神に告げたてまつりたまへり。

此くて邇々藝命天降りしたまひて後に、天之宇受賣命に告げたまはく、「此吾御前に立ちて仕へたてまつりし猨田彦大神は汝專ら見顯せる

によりて、また今汝送りたてまつれ、また其神の御名は汝負ひて仕へたてまつれ、」とのたまひしかば、天之宇受賣命乃ち天神の御子ののたまひしまゝに猨田彦大神を送りたてまつりたまへり。

此によりて天之宇受賣命の御未を猨女君と云ふ、猨田彦の男神の御名を負ひたてまつりて女なれども猨女君と云ふなり。

天之宇受賣命此く猨田彦神の乞ひたまひしまゝに送りて還りたまひて後に、悉く青海原の鰭の廣物鰭の狹物と大き小き魚どもを遺ることなく追聚めて、「汝等は天神の御子に仕へたてまつらんや、」と問ひたまへば、諸の魚ども皆仕へたてまつらんと白す中に海鼠ひとり白さず。天之宇受賣命乃ち、「此口や答へせぬ口」と云ひて、紐小刀を以て其海鼠の口を折きたまへり。此によりて海鼠の口今に折けたり。また後の御世御世に島の速贄たてまつる時に、猨女君に賜ふこと、此其ことの起源

なり。

猨田彦大神伊勢國阿邪訶に坐ます時に、漁して比良夫貝に其御手を咋合されて、海水に沈み溺れたまへり。其沈みて底にゐたまふ時の御名を底度久御魂と申し、其海水のつぶたつ時の御名を都夫多都御魂と申し、其沫さく時の御名を阿和佐久御魂と申したてまつる。

高千穂槌觸峯

然る後に天照大御神乃ち天津日高彦火邇々藝命を天之磐座はなち眞床覆衾につゝみたてまつりて、天之磐戸を引き開けて、天降したまふ時に、猨田彦神は御先に立ちて導きたてまつり、天之忍日命は背に天之磐靫を取負ひ、臂に稜威乃高鞆を著け、手に天之桙弓を取りもち、天之波

波矢を手狹み、八目之鳴鏑を副へもち、頭槌之劒を取佩きて大久米部を率ゐて御前に立ちて仕へたてまつり、天之村雲命太玉串を取り、天之忍雲根命天津諄辭を宣りて祓ひ清めつゝ、此く各々仕へたてまつらしめて、天津日高彦火邇々藝命天之浮橋に立出でたまひ、天之八重雲を排分けて稜威の道別に道別きて、猨田彦神の申したまひし如く、筑紫の日向の高千穂の槌觸峯に天降りつきたまへり。然して後に大久米部を天之靫負部となしたまへり。

邇々藝命高千穂の峯に天降りつきたまひし時に、天晴く畫夜わかれず、物の色別ち難く、御供の者ども皆道に迷へり。茲に土蜘あり、名を大鉗小鉗と云へり。此大鉗小鉗天神の御子の御徒者の道に迷へるを見て、皇御孫命の御手を以て稻千穂を拔きて籾となして、四方に投げちらしたまはゞ、立どころに大虛開晴りなん、と申したてまつりしかば、邇々

藝命乃ち申したてまつりしまゝに、稻千穗を搓きて籾となして投散したまふ。此く投散したまひしかば果して天開晴れ、日月照りわたれり。此によりて高千穗の峯といふ。

皇御孫命此くて高千穗の峯より降りたまひて、國求めたまひつゝ吾田の笠狹に到りたまひ、遂に長屋之竹島に登りて其ところを巡覽たまへば神あり、其名を事勝國勝長狹と云ふ。皇御孫命此神に「此國は誰の國ぞ」と問ひたまへば、其神答へて「長狹が有つ國なり、また住める國なり。然れども皇御孫命にたてまつらん、御心のまゝにしたもふべし」と申したてまつる。皇御孫命聞きて喜びたまひ、「此國は韓國に向ひ、眞道に笠狹之御前を道にして、朝日の直刺國夕日の日照國なり。然れば甚吉地なり」とのたまひて、乃ち下津石根に宮柱太く打立て天津御空に千木高く打竝べて、宮殿作りたまひて留りたまへり。此國神事勝國勝長狹は

伊弉諾尊の御子なり、亦の名を鹽椎老翁と云ふ。

天之忍雲根命

天津日高彦火瓊々藝尊天降りして高千穗の宮に留りたまひて後に天之兒屋根命皇御孫命の御前に仕へたてまつりて、御子天之忍雲根命を高天原に上らしめて、天神の命を受けたまはらしめて、皇御孫命の御膳水をたてまつり、また大嘗たてまつりて天神之壽詞を白したまへり。

大嘗祭の政事此時よりはじまりて、後の世まで絶えず行ひたまふ。

中臣壽詞

現御神と大八島國知しめす大倭根子天皇が御前に、天神の壽詞を壽詞定めたてまつらくと申す。

高天原に神留ります皇親神魯岐神魯美の命をもちて、八百萬の神等を集へたまひて、皇御孫命は高天原に事はじめて、豐葦原之瑞穗乃國を安國と平らけく知しめして、天津日嗣の天津高御座に座まして、天津御膳を長御膳の遠御膳と、千秋の五百秋に瑞穗を平らけく安らけく齊庭に知しめせと事依さしたてまつりて天降し坐ましゝ後に、中臣の遠祖天之兒屋根命皇御孫命の御前に仕へたてまつりて天之忍雲根命を天乃二上に上せたてまつりて、神魯岐神魯美命の前に受けたまはり申すに、皇御孫命の御膳都水は現國の水に天津水を加へてたてまつらむと申せと事教へたまひしによりて、天之忍雲根神天之浮雲に乘りて、天之二上に上りまして、神魯岐神魯美命の前に申せば天之玉串を事依さしたてまつりて、此玉串を刺立てゝ夕日より朝日の照るに至るまて天津詔刀の太詔刀言をもて告れ、此く告らば麻

知は弱韮に由都五百篁生ひいてむ其下より天之八井いてむ、此をもちて天津水ときこしめせと事依さしたてまつりき。

此く依さしたてまつりしまゝに開しめす齊庭の瑞穗を四國のト部等太兆のト事を持ちて仕へたてまつりて、悠紀に近江國野洲、主基に丹波國氷上を齊定めて、物部の人等、酒造兒、酒波、粉走、灰燒、薪採、相作、稻實公等大嘗の齊場に持齊はり參來て、齊しり嚴しり持恐みかしこみも清まはりに仕へたてまつりて、月の內に日時を撰びさだめて獻る悠紀主基の黑木白木の大御酒を、大倭根子天皇が天津御膳の長御膳の遠御膳と汁にも實にも赤丹乃穗にきこしめして豐明りに明りましまして、天神乃壽詞を稱辭定めたてまつる。

皇神等も千秋五百秋の相嘗に相うづのひたてまつり、堅磐常磐に齊ひたてまつりて、茂御世に榮えしめたてまつりて、天地月日と共に

照し明らし坐ますことに、本末傾かず茂槍の中とりもちて仕へたてまつる中臣の壽詞を稱辭さだめたてまつらくと申す。

大嘗祭祝詞

集侍れる神主祝部等諸聞しめせと宣る。

高天原に神留ります皇睦神漏岐神漏美の命もちて天社國社と敷き坐せる皇神等の前に白さく、今年十一月中の卯の日に、天津御食の長御食の遠御食と皇御孫命の大嘗きこしめさむ爲のゆえに、皇神たち相諸のひたてまつりて、堅磐に常磐に齊ひたてまつり、茂御世に幸へたてまつらむと依さして、千秋五百秋に平らけく安らけくきこしめして、豐明りに明りまさむ皇御孫命の宇豆の幣帛を明妙照妙和妙荒妙に備へたてまつりて、朝日の豐榮登りに稱辭竟へたてまつらくを、諸きこしめせと宣る。

事別きて忌部の弱肩に太襁とり掛けて、持齊はり仕へたてまつれる幣帛を神主祝部等請けて事落ちず捧げもちてたてまつれと宣る。

木花咲夜姫命

天津日高彦火邇々藝命笠沙の御埼に出て行きたまふ時に、秀起てる波の穂の上に八尋殿を立てゝ手玉玲瓏に機織る少女あり。皇御孫命長狹を召して、此少女は誰が兒ぞと問ひたまへば、長狹答へて、「大山津見神の女子なり、大が名を石長姫と云ひ、少が名を木花咲夜姫と云ふ、亦の名を豐吾田津姫と云ひ、また鹿葦津姫と云ふ」と申したてまつれり。

皇御孫命乃ち其美女に「汝は誰ぞ」と問ひたまへば、其美女答へて、「吾は大山津見神の子なり、名は木花咲夜姫と云ふ」と白したまふ。また兄弟